第二章　八坂神社所蔵資料に見る山鉾行事の近代

「維新改正祇園会氏子私祭記」解説

下坂　守

八坂神社が所蔵する「維新改正祇園会氏子私祭記」と題する本史料は、明治五年（一八七二）に開始された氏子祭に関わる各種の文書を書写したものである。四つ目綴じの冊子本に書写されており、その形状等は以下の通りである。

料紙　三椏
装幀　袋綴じ
法量　縦 二五、〇センチ　横 一七、二センチ
丁数　四五丁（最終丁は白紙）

表表紙・裏表紙ともに墨引模様（茶色）の厚紙で、表紙には「維新改正祇園会氏子私祭記　貞」と表題を記した外題が貼付されるほか、次のような記載をもった方形紙が二紙貼付される。

①「二百六十五番四冊ノ内四」（料紙は墨流し模様。墨書）
②「昭和四年調　第一冊ノ内　」（料紙は紺紙。数字のみ墨書、他は印字）

ともに神社の文庫における分類のために貼られたラベルであるが、①の「四冊ノ内四」という記載からは、外題末尾の「貞」の一文字とともに本冊が「元」「亨」「利」「貞」の四冊からなる書籍の最終冊であることが判明する。ちなみに本文中には「前之冊」「前冊」といった表現が各一か所見えている。八坂神社には現在、本冊だけが伝来する。

成立年代は正確にはわからないが、ラベル②に「昭和四年調」とあるところからすれば同年以前であることはまちがいなく、料紙・筆跡などをあわせ考えれば明治末年から大正期（一九一二～二六）の早い時期に作成されたものと推定される。

本冊に書写される文書・記禄は、その内容から大きく四種（A・B・C・D）に分類できる。その四種の内訳は次の通りである。

A 明治五年五月の氏子祭の創設に関わるもの(二)
①土田作兵衛手記1　明治五年
②氏子町（学区）氏子祭創設願書　明治五年五月

B 明治六年以降、同十一年までの山鉾町の祭費増額願いに関するもの
①私祭事務掛山鉾町助費金明細　明治六年十月
②氏子祭日附記　明治九年
③神事当番神役集評願書（披露書）　明治十年
④神事世話掛山鉾三基休願書　明治十年六月二十九日
⑤山鉾町助費増額願書　明治十年六月
⑥山鉾町助費増額願書　明治十年六月
⑦氏子祭祭費分賦書　明治十一年

C 明治五年以降に土田作兵衛が作成した三種の手記（追加）
①土田作兵衛手記2　年未詳
②土田作兵衛手記3　明治九年七月三日
③土田作兵衛手記4　年未詳

D 明治十二年のコレラ流行による氏子祭の延引に関するもの
①私祭掛・産土当番私祭期延願書　明治十二年十月十三日
②八坂庶祭事務擔当人・氏子当番願書　明治十二年十月三十一日

③八坂庶祭事務擔当人・氏子当番願書　明治十二年十月三十一日
④八坂庶祭事務擔当人・氏子当番願書　明治十二年十月三十一日
⑤八坂神社庶祭事務掛願書　明治十二年十一月
⑥八坂庶祭事務擔当人伺書　明治十二年十一月二十二日
⑦山鉾町々総代連署頂戴金受証　明治十三年七月十一日

A①は明治五年（一八七二）に氏子祭の創設を提唱した土田作兵衛の手記で、[二]同祭設立にいたる経緯が記される。また、A②は土田の提案に基づき八坂神社氏子町（各学区の学区長・副学区長が連署）が京都府に同祭の創設を願い出た願書。

山鉾巡行は氏子祭においては氏子町からの補助金（助費）によって執行されるが、Bは山町・鉾町がその増額を氏子町（氏子中）に願い出た願書を集めたもので、そのなかには初期の補助金の明細（B①）のほか、山町・鉾町が氏子町の「神事当番」「神事世話掛」宛に発した願書等（B④～B⑥）も含まれる。[三]

Cは明治五年以降の氏子祭に関する土田作兵衛の記録を集めたものである。A①以降のできごとを記した手記（C①）のほか、氏子祭で「赤丸高張り提灯」の使用を許可されるにいたった経緯を記した手記（C②）や、同祭における「鬮取り」のありかたを記録した手記（C③）によって構成される。

末尾のDは明治十二年にコレラの流行で山鉾巡行が同年十二月に延引となったときに「神事掛」「産土当番」が発給した各種文書（①～④）、同年十一月の山鉾の「御苑地」への「曳行」にあたりに「八坂神社庶祭事務掛」が氏子町外の町々からの寄付金集めを「下京区長」に願い出た願書（D⑤）、および久邇宮から下賜された祝い金に関わる文書（D⑥⑦）を集めたものである。[四]

本冊にはこれら計十九点の文書・記録とともにそれらが作成されるにいたった経緯も一部記されており、明治五年以降、同十三年にいたる氏子祭の歴史を知る上で貴重な史料集となっている。

なお、最後に本書の「維新改正祇園会氏子私祭記」（傍点は下坂。以下同じ）という題名に関して述べておきたい。

明治元年五月に「祇園社」が「八坂神社」と改名されて以降、「祇園会（祇園祭）」という祭礼名称は公的な文書では一切用いられなくなる。それにもかかわらず本書は「祇園会氏子私祭記」と題されている。これはなにを意味するのであろうか。

結論からいえば、この題名は八坂神社の氏子町（氏子中）が、「祇園会」という呼称を後世に伝えたいという想いを込めた付けたものであったと推定される。

本書に収められている氏子町や土田作兵衛が作成した文書・記録には「祇園会」という名称が、次のような形で用いられている。

「八坂神社私祭祇園会日附記」（B②）
「八坂私祭祇園会山鉾」（C①）
「八坂神祭祇園会」（C①）
「祇園会」があたかも「私祭（氏子祭）」の一部として存在するかのようなこのような表現は、明治五年以降、公には「私祭（氏子祭）」と呼ぶほかなくなったこの祭礼を、人びとがなんとか「祇園会」とも呼んでいきたいと強く願って用いたものと考えられる。

「祇園会（祇園祭）」という言葉が公的にいつから復活するのか。今後の研究課題としたい。

註

（一）A・B所載の文書・記録については、その一部が八坂神社蔵『社務要記類纂（私祭一）』十一に収録されている。『社務要記類纂』は八坂神社の各種の近代文書を部類分けして収めた綴りで、全八二冊からなる。

（二）氏子祭および土田作兵衛の手記に関しては、拙稿「八坂神社私祭「氏子祭」考―近代における祇園会の改変―」（奈良大学史学科編『奈良史学』四〇号、二〇二三年二月）参照。なお、A①の「土田作兵衛手記」1は文章が一部欠けていたり、他の写本と少し異なる箇所がある。それらの箇所には『社務要記類纂（私祭一）』十一所収の同手記（写）の文章を並記しておいた（〔　〕の部分）。

（三）「神事当番」「神事世話掛」に関しては、前掲註（2）拙稿参照。

（四）明治十二年のコレラによる氏子祭の延行および「御苑」への「曳行」については、祇園祭山鉾連合会編『近世祇園祭山鉾巡行志』（同連合会、一九六八年）参照。

本資料の翻訳を御快諾下された八坂神社に御礼申し上げる。

「維新改正祇園会氏子私祭記」

〔凡例〕

・本資料は八坂神社が所蔵する「維新改正祇園会氏子私祭記」を全文翻刻したものである。
・原史料の影印も、翻刻文の後にすべて収録した。
・翻刻文の改行は原史料に従った。改頁の箇所は「｜」で示した。
・翻刻文では旧字や異体字は当用漢字に直したが、固有名詞は原史料の表記に従った。また合字は仮名に直したが、「ゟ」のみ残した。
・誤字や文意が通じがたい箇所などに、翻刻文では脇に（ママ）と付した。
・史料の翻刻は下坂守（京都国立博物館名誉館員）が担当した。

「維新改正祇園会氏子私祭記」翻刻

（表紙外題）

「維新改正祇園会氏子私祭記　貞　」

（内表紙内題）

「（朱方印）
「八坂神社
文庫之印　」
維新改正祇園会氏子私祭記　貞　」

維新改正祇園会氏子私祭記

（A①）

祇園祭礼山鉾行荘ノ次第ハ往古ヨリ普ク人ノ能知ル処ナレハ
是ヲ略ス、方今国家時勢一変百叉御維新ノ時ニ当
リ、諸社旧来神仏混淆ヲ分別在セラル、ニ附、当社ノ
儀モ祇園ノ号ヲ廃セラレ、亦氏地町々ニテ神輿轅町、
八坂社ニテハ神人駕輿丁ト称スル者モ廃セラレ、且故ア
ツテ摂津難波村ヨリ登リ来テ神輿ヲ舁奉ル者ヲモ
他管下ノ者ナレハ停メラルニ付テハ、明治五年壬申五月ニ至
リ、已ニ例祭ノ期相近ツケトモ祭式如何執行相成ルヤ未
定ニテ、山鉾建モ覚束ナシ、其故ハ、中古織田公執政シノ時代、年
貢ノ口米ヲ以テ神事ノ費ニ充行ル、ニ依テ地ノ口ト称シ、氏子町
々ヨリ山鉾町其他神事掛リエ多少トモ持寄来ル例ナリ
」

シニ、近年ニ至リ定額ヲ減少セシ向モ在是、殊ニ元治甲子年
大災以後ハ氏地町々ノ景況モ移リ変リ、神祭ノ叉モ租（粗）
暴ニ成行、右地ノ口米出納ニ付テモ各私論ヲ言立テ、不
納ノ向モ少ナカラス、故ニ不出ノ山鉾モ多ク
〔皇国中無比ノ大壮観ナル当社ノ神祭衰廃ニ及フ時ハ〕
皇国（諸）ヨリ競テ見物ノ為メ入京ノ人モ無之、氏地ハ勿論都
下一般ノ賑ヲ失フノミナラス、右村（在）ニ至ル迄自ラ不融通ニ
立到ルハ必然ニテ、実ニ歎息ノ至リナリ、爰ニ明治五年五月
下京第十一区副区長土田作兵衛御府庁エ出頭ノ処、上京廿八区区長畑嘉兵
衛殿当番詰合ニ付、右畑氏ハ従来轅町住ノ古老ニテ、氏
〔神神輿ノ儀ハ万事轅町ノ管係タルニ依リ、当年〕
神祭神輿舁十（町カ）等如何成ルヘキヤト相尋ル処、畑氏答ニ未
定ノ趣、就テハ其区区長富永太右衛門殿モ轅町ノ住ナリ、如何
申居ラル、ヤト尋ニ付、是以テ貴説ト同シ由相答ル所、畑氏
亦云、昨年一旦神人駕輿丁モ廃セラル、上ハ、今復旧
轅町ヨリ取扱フ事憚アリ、兎モ角モ富永氏ト合議シ、
八坂神官ニモ示談致スヘキ趣申サル、ニ付、亦答テ云、貴
説誠ニ止ヲ得カタシト雖モ、此節難波村ヨリ旧例ヲ申立上京
奉役致度、当御府エ出願致スト雖モ、敢テ御聞届
無之由、何分来月ノ例祭今日ニ至リ取ト留メサル事モ無之テハ、
今年ノ神祭執行甚心元ナシ、依テ僕ノ愚按ニ、当時轅町ノ
廉モ無是故、従来ノ地ノ口米ヲモ廃シ、神輿ヲ始メ山鉾
祭礼掛リノ入費、総テ氏地町々一般ニ分賦シ、持寄金ヲ以
テ祭儀ヲ修セハ公平ノ理ニテ、永世不朽ナルヘシ、足下老体ト
」

云、特ニ轅町ノ住ナレハ、其廉ヲ以テ厚ク配慮下サレ度段
懇談ニ及フ処、畑氏云、神輿渡御ノ儀ハ吾輩徒(従)来擔
当セシ事ナレハ、猶当年ノ祭礼ニ至テモ精々心力ヲ尽スヘシ、山
鉾一般ノ入費ヲ氏地町々ヱ分賦スルニ至テハ意外ノ事ナリ、
当今ノ時体、右様ノ儀申出シ、万一御譴責ヲ蒙ル事
アラハ何ノ益カ有ラン、吾此儀ニ同意ナシカタシト、依テ僕亦如
何トモ為シ方ナケレハ、胸裏ニ決案シ、独断ヲ以テ総区長
船橋氏・遠藤氏其外某々エ申出ルニハ、来月氏神
私祭ニ付前刻ヨリ畑氏ト議論致ス処、然々ナリ、依テ
僕氏地ノ区長中頼談致度ニ付、万一御府庁ノ
上聞ニ達シ如何敷思召サシ(レ)、各君ェ御沙汰ノ品モ
有之節ハ、僕壱人御召出シ成シ下サレ度、左アル時ハ
愚存具ニ言上仕ルヘク(キ)旨申置キ退出ス、然ルニ下京
第三区副区長村田五兵衛殿ハ、従来山鉾地
ノ口ノ儀ニ付心配致シ居ラル、事有是ニ付、右村田氏ヱ
相訪、今朝ヨリ御府庁詰所ニテ畑氏ト議論ノ趣、且総区長
衆ニ申置タル始末具ニ面話シ、因テ愚存ニハ好機会ナレハ従
前ノ地ノ口ヲ廃シ、氏地一般ノ持寄金ニテ祭礼執行致シ
度ニ付、不日氏地ノ区長衆ヲ十壱校ェ招集シ合議致シ度
ニ付、足下モ万端奮発助力致シ呉ラレ度談シ置、夫ヨリ
富永氏エ出向、前件ノ始末委細ニ面話致ス所、畑氏ノ申
条、轅町ノ存意モアル事故、少シハ違存ナリ、夫ヨリ亦下京第
十区区長松島与七殿エ出向、前件ノ次第委曲説話シ、万
端配慮、且指揮ニ預リ度申出ル処、松島氏云、此支合
」

議スルニハ我十区以東ヲ後ニシ、以西ノ各区ヨリ先熟談シ、
其模様ニテ氏地一般各区長招、同会議ナサハ然ルヘカランカト、僕
大ニ此議ニ服シ、則チ五月十四日、十壱校ニヲイテ上京廿六区副区(長)
吉川氏・下京壱区ノ長矢田氏、同副区長上田氏、下京二区ノ
長木村氏・同副区長沢渡氏、下京九区ノ区長高木氏、下
京十区ノ長松島氏、下京区十二区ノ長瀬氏、及当区長富
永氏等招会シ、村田氏・僕両人会主故、両人ヨリ各君エ頼
談ニ逮フ主意ハ、目前来月八坂社神祭ノ儀ニ付、従来神
輿ヲ取扱フハ轅町ナリ、然ルニ昨年神人駕輿丁廃止ラ(セ)
ル、上ハ、当今旧轅町ヨリ執成モ致シ難シト雖モ、畑氏・富
永氏ハ旧轅町住故、殊ニ尽力是アレトモ、各町ヨリ持寄ルヘキ
地ノ口モ納メサル向モ不少、就テハ山鉾出サヽル(ル)町モ多ク、右様神
祭衰廃致ストキハ都下不融通大方ナラス、甚以テ歎息ノ
至リナリ、依テ如何ニモ為シテ、祭儀従前ノ如ク執行ヒ度ニ付
テハ、至急ノ申立ナレトモ、当年ヨリ従来ノ地ノ口ヲ廃シ、神輿渡
御ノ入費ヲ始メ、山鉾其外神事掛リノ諸入費、更ニ氏地町
々一般ニ分当シ、永世不窮ノ祭儀執行〔相成ル様〕致度旨陳述スルニ、
各々庶祭費ヲ尋問ス、答テ曰、先予算神輿渡御ノ入費
〔各君ヨリ神輿渡御ノ入費・山鉾入費等凡何程ト尋ニ付、
精細ノ儀ハ難計ト雖モ、大略祭礼ノ入費〕
金百円、鉾一基ニ付入費金五十円、山一基ニ付入費金十二
三円ト見積リ、氏(地)惣計大数五百町ヲ以テ計算セハ可ナル
ヘキ趣答ル処、諸君計算シテ大凡壱町金壱円三拾
銭ニ当ルト云、然レ共其町数ヲ精計スレハ四百三十五町ナリ、依テ
」

衆議シテ云、当年ノ今日ニ至リ斯ノコトキ大望遽ニ打合カタシト、
時ニ高木氏断テ云、神輿渡御ノ入費ノ儀、氏地中ヨリ持ヨリ
執行ヘキハ至当ナリ、山鉾ノ入費ニ至テハ迚モ行届キカタシト、議
論一定セス、然リト雖モ都下ノ賑ハモトヨリ山鉾ニアル事ナレハ、
猶再三熟議ノ上、今日集会ノ各君ヨリ其モヨリノ各区エ前
議ノ始末具ニ伝説シ、倶ニ勧奨ノ議懇(儀)ニ依頼シ、村田氏・
僕等ハ今日集会無之各区ヘ頼談致シ、再ヒ来ル廿一日氏地
各区正副区長中、当十壱区エ請招シ会議致度段
約定シ一同退会ス、依テ其翌日ヨリ村田氏・僕ハ氏地各区エ
奔走頼談シ、廿一日ニ至リ総会議ヲナストコロ、衆論紛々ニテ議ニ」
服セサル区モ三四名アレ共、大概壱町金壱円ト見積リヲ以テ
各区町々エ説諭イタシ、其上返答致スヘキ趣ニ付、何分前
議協同無之時ハ不得止山鉾ヲ不出町モ不少ニ付、承諾ノ
有無ニヨツテ山鉾町ノ心得モ有之事ナレハ、廿四日限リ封書ニテ
村田氏方迄確答被下度段約定致シ、今日ノ会ヲ退出ス、
今日集会ノ人数、氏地上下京凡テ廿六区ノ正副区長、並ニ旧
轅町ヨリモ出会ニテ、総人数八十七人ナリ、然ニ廿四日ニ至り前
儀(議)協同ノ旨封書ニテ答来ル方大凡半通リニテ、其余ハ有
無ノ答書モ来ラス、依テ亦村田氏ト僕、未タ答書来ラサル
向々ヘ頼談ニ及、漸々廿六日ニ至り惣テ協和熟談相調ニ付、即
刻願書案取調、僕ヨリ総区長船橋氏ヘ相断、廿七日、本
願書面ニ各区正副区長連署調印シ、廿八日、府庁ヘ上呈ス、
然ニ即今主上御入京御駐駅中ニテ、御府庁モ
特ニ御多端ノ折柄ナレ共、晦日、上局ニテ右願書御披覧
相成、庶務課吉井殿御取扱ニテ、右書面ノ趣相違無之
ニヲイテハ、総区長連印致シ(ス)可旨御沙汰有之ニ依テ、乃チ
在勤総区長熊谷久右衛門殿・長尾小兵衛殿・舟橋清左
衛門殿等連署調印シ、再ヒ上呈致シ、所願ノ趣御聴
届相成候段御書下ケ頂戴ス、誠ニ未曽有ノ事件、万」
端阻滞ナク速ニ允許ヲ蒙ル事、偏神慮ノ冥助ニ依ルト
雖モ、又各区長衆ノ配意且各町懇和協同尽力ノ
致ス所ナリ、右願書江御書下御割印有之、本紙ハ
最初奮励建議ノ故ヲ以テ、下京三区・同十壱区等ノ
両役ニテ、隔年交番ニ是ヲ預ル事ニ定ム、又神支当番
二区宛ト定ムル支ハ明治六年ヨリ始メニ、鬮取ニテ当年ハ
上下(ママ)同七年ハ上下(ママ)トシ、各町々ニテ神支ノ入費金ヲ集メ、区々ヨリ
五月廿日迄ニ当番ノ校江持寄、廿日ニハ当番ノ校ニヲ
イテ、下京三区・同拾壱区ヨリ正副区長ノ中壱人ツヽ、
立会預リ置、山鉾町々エハ三校・十壱校隔番ニ渡方
致シ、右者都下ノ衰微ニ致ラサルヨフ希望スル主意ナレハ、山鉾町々我意
ヲ不申立、例年懈怠ナク山鉾ヲ出スヘキ旨結約ス、然ル上ハ万一
今後其町ニ苦情有テ山鉾出シ難キ時ハ、必氏地各区長中ヘ」
其次第書取ヲ以テ断出サルヘシ、若各区長エ申出カタキ訳
アラハ、其区内ニテ熟議シ助費金ヲ以テ可成様致シ、祭日整
々行列ニ洩ル事無之様希望スル者ナリ

（A②）

前条願書之写

八坂神社氏子祭式之儀御願

一八坂神社氏子祭式行粧入費之儀、従来氏子町々ゟ地　」
之口与唱へ持寄ニ而相務来り候処、右地之口料町々不同
有之候ニ付、今般地之口料相止メ、氏子中平等ノ入費ニ
仕度段区毎町々申合、祭式相勤申度、此段奉願上候、
右之趣御聞届被成下候ハヽ、難有可奉存候、　以上

壬申五月廿五日

上京廿六区
区長　遠藤善兵衛㊞
副区長　吉川吉次郎㊞
同　廿七区
区長　古橋兵左衛門㊞
副区長　森治郎右衛門㊞
同　廿八区
区長　畑嘉兵衛㊞
副区長　山口仙之助㊞
同　廿九区
区長　野村源兵衛㊞
副区長　多田佐兵衛㊞
同　卅区
区長　田中松之助㊞
副区長　道江嘉兵衛㊞　」
同　卅壱区
区長　富永武右衛門㊞
副区長　三浦清助㊞
下京第壱区
区長　矢田徳右衛門㊞
副区長　上田寅吉㊞
同　第弐区
区長　木村小兵衛㊞
副区長　近藤吉右衛門㊞
同　第三区
区長　森川吉左衛門㊞
副区長　村田五兵衛㊞
同　第四区
区長　須羽彦右衛門㊞
副区長　長野清三郎㊞
同　第五区
区長　太田半治郎㊞
副区長　玉尾與兵衛㊞　」
同　第六区
区長　吉田佐助㊞
副区長　高木三郎兵衛㊞
同　第七区
区長　三宅留治郎㊞
副区長　原田忠兵衛㊞
同　第九区
区長　高木太郎右衛門㊞
副区長　西田善兵衛㊞
同　拾区

区長　松嶋與七㊞
副区長　栗原吉兵衛㊞
同　拾壱区
区長　富永太郎左衛門㊞
副区長　土田作兵衛㊞
同　拾弐区
区長　長瀬藤兵衛㊞
副区長　矢部太兵衛㊞　」
同　拾三区
区長　波多野徳兵衛㊞
副区長　長谷川治兵衛㊞
同　拾四区
区長　植村七兵衛㊞
副区長　熊谷市郎兵衛㊞
同　拾五区
区長　杉浦治郎右衛門㊞
副区長　井口彦右衛門㊞
同　拾七区
区長　川本清造㊞
副区長　河口治郎兵衛㊞
同　拾八区
区長　安川九兵衛㊞
副区長　藤原忠四郎㊞
同　拾九区
区長　内田孫兵衛㊞
副区長　前田茂兵衛㊞　」
同　廿区
区長　藤岡惣右衛門㊞
副区長　山田伊助㊞
同　廿二区
区長　平居甚右衛門㊞
副区長　小澤権左衛門㊞

前書之通申出相違無御座候ニ付奥印仕候、以上

総区長　熊谷久右衛門㊞
長尾小兵衛㊞
船橋清左衛門㊞

京都府
御庁

右之通連署調印ニ而出願致候処、御聞届相成、御書下ヶ
頂戴仕候
嗚呼百支一新之時ニ際会シ、当社私祭之儀ヲ
改定シ、従前ノ地之口ヲ止メ、氏地町々ヨリ公平ニ
分賦出金ヲ以、永世不朽ニ祭式ヲ修セハ、聊敬
神之道ニモ叶フヘケレハ、苟モ従支スル者私情ヲ去、
精実神ニ仕ノ心ヲ以テ其役ヲ務ムヘキ也

下京第十壱区

明治五年壬甲六月　区長　土田作兵衛記ス

（B①）　」

明治六年ヨリ同十年迄、左之通山鉾へ氏子町
ゟ助費金渡ス

一金三拾円宛　外ニ金弐円宛神児助費
右者長刀鉾・月鉾・放下鉾、三町へ渡ス
一金三拾円宛
右者函谷鉾・鶏鉾両町へ渡ス
一金弐拾三円也
右者岩戸山町へ渡ス
一金八円宛
右者芦刈山・占出山・油天神山・太子山・白楽天山・山伏山・伯牙山・郭巨山・孟宗山・錦天神山・木賊山・保昌山、十二町へ渡ス
一金弐拾四円也　外ニ金三円電信機手数心付
右者観音山町へ渡
一金八年宛
右者橋弁慶山・鯉山・常(浄)明山・鈴鹿山・行者山・黒主山、六町へ渡ス
明治八年ヨリ八幡山出山ニ付同年ヨリ十年マテ是ヲ渡ス
一明治八年六月廿五日、金壱円弐拾五銭ニ手洗井神支費、手洗水町へ渡ス
明治十年八月八日、助費金之外有志増金渡左之通　本年山鉾町ヨリ助費増願出之処、未究ニ付事務掛ノ各区ニ依頼シ、有志集高共分賦ス

一金拾六円也　但鉾壱本ニ付金八円宛
右函谷鉾・鶏鉾両町へ渡ス
一金三拾九円也　但し鉾壱本ニ付金八円宛
外ニ金五円宛神児助費
右者長刀鉾・月鉾・放下鉾三町へ渡ス
一金拾四円也　但シ壱本ニ付金七円宛
右者岩戸山・北観音山両町ニ渡ス
一金拾九円也　但シ壱本ニ付金壱円宛
右者出山十九町へ是ヲ渡ス、山之名、前ニ有之ニ付略之

（B②）

八坂神社私祭祇園会日附記

七月一日　吉符入之式、従前之通
七日　鉾之榊　僮社参之事　午前
附り、本日山鉾町々社参シテ神酒頂戴之支
十日　神輿洗（祇園町ヨリ遷物出ル）　午后十一時
同日　鉾建　午前一時ヨリ
十一日　鉾車懸　午前十時
十四日　山建　午前六時ヨリ

十五日　御府庁(二)於テ鬮取、山鉾順行定之支
同日　鉾曳初　山舁初　午前十時
十七日　当祭日山鉾順行　午前七時
同日　御神輿御旅所迄行幸　午後四時
十八日　鉾建
廿一日　山建
廿二日　鉾曳初　山舁初
同日　御府庁鬮取、山鉾順行定
廿四日　当祭日山鉾順行　午前七時
同日　御神輿還幸　午後二時
廿八日　神輿洗、遷物出ル　前十日同
右毎年例祭定日也
明治九年(六月)　私祭支務掛　土田　村田

」

右之通り私祭之日順序、各区町々江通知相成候也

（B③）

披露

一八坂神会ニ付過日来度々公許之上、当年之処ハ旧例通ニテ祭式相勤(勤)候様治定有之候、然ル処、昨九年已来神役之町村ゟ被申出候次第柄、是亦不得止支情ニテ多分之失費年々相嵩シ候テハ、自然ト衰廃之場合ニ立至候テハ、市中之景況ニ相カヽハリ候テモ歎ケハ敷ト被存候、就而者町々ゟ被差出候別紙書面御一覧之上、可然公許無之候而者、祭役町村江当区(番)ヨリ申諭方者無之候間、宜臨時之御計御集評被下度候也

神事当区(番)
第拾区々長
川勝利平㊞
第拾二区
井上五郎兵衛㊞

」

産土
各区々長

（B④）

別紙山鉾町々之
添書

別紙之通山鉾町連署調印ニ而再応之依頼書拙者共ヨリ差出呉候様申出之旨趣者、元治元甲子年大災之以後、氏地町々之景況モ移変、神祭等モ粗暴ニ成行、都下景況ヲ失ナハントス、当祇園会ニ限リ往昔ヨリ産土町々ヨリ地ノ口米ト称シ、其掛リヘ米金ヲ持寄、祭儀ヲ執行候処、甲子年変後右持寄ノ定額ヲ減シ、私論ヲ申立不納之向モ少ナカラズ、不出ノ山鉾モ多ク(キ)故、見物之多、諸国ヨリ入京之人民モ無之、氏地ハ勿論都下一般之賑ヲ失ヒ、村在ニ至ル迄自ラ不融通ニ立到ラントス、故ニ産土該区々長中合議協同シテ、祇園祭ハ神支之事務計ニ有ラス、都下之景況ト諸商業ニ係リ候ナレハ、能ク勘弁ナラテハ不相成支ト協議シ、先該祭諸入費之見込相立候節、悉ク其費ニ充テスト雖モ、両度神輿渡行祭礼之入費金百円、車附ノ鉾壱基ニ付金五拾円、舁山壱基ニ付金十二三円、但シ鉾五基、曳山弐基、

」

舁山廿基未出ハ（船鉾・観音車付傘鉾弐本、蟷螂山等）其外神輿之丁人足遣
ス料、弓屋（矢）町ヨリ出ル鉾武者等之助費、其外諸掛総計
六百五拾円余也、是前議之見込、氏地四百卅余町ニ分賦セ
ハ壱円五拾銭余ニ相成、其年五月廿一日集議ナレハ、当祭期ニ
近キ今日ニ至リ期之如キ大望遽ニ打合カタシ、追テ議スル、先
当年之処壱ヶ町壱円宛之出額ヲ以テ可相務旨、各区
々協和熟議相調候ニ付、即刻願書相認メ、産土各区正
副区長中連署調印ニ而、五月廿八日御府庁江上呈ス、然
ルニ、即今
主上御入京御駐駅中ニテ御府庁特ニ御多端ノ折柄
ナレ共、晦日　御上局ニテ右願書御披見相成、書面之
趣相違無之ニ於テハ、総区長連印可致旨御沙汰
ニ有之、乃チ在勤総区長熊谷久右エ門殿、長尾小兵
衛殿・舟（船）橋清右エ門殿等連署調印ニ而再ヒ上呈相成
候処、願之趣御聞届相成、御書下頂戴仕候儀者
各区ニ於テ御承知之処也、然ルニ前件協議之節
神輿渡行祭礼費ヲ始メ諸費之内何れ茂不充ト雖モ
又不足不多候処、其内車附山鉾之費ニ限リ多分之不足
ニ相成候故、別紙鉾町々ヨリ助費増シ頼出候者不得
止之儀ニ御座候、前件合議之節、拙者共抽テ此支務ニ
擔当致候得共、固ヨリ我等鉾町之居住故、其鉾町々江多
カラス、其相当之助費金強テ申募ル支不可然、最前見
込鉾入費五拾円ト見ナシ候ハ、全ク多カラサル処ニシテ、実支
出鉾入費多分之募出ニ有之候故、今般拙者共ニ迫リ候ニ付、
車附七基江助費増金廿円宛、舁山廿基江金弐円宛
増方之儀ハ不得止、拙者ヨリモ御依頼申度候、右之外ニ
兼而申置候久世村神僮江当度ヨリ金弐円五拾銭
馬代トシテ渡方之儀、各区御中御協議被下度、兼
テ御承知之通、当祇園祭者神事而已ニテハ無之、都下
之景況ト諸商業之融通ニ抱（拘）リ候次第ニ御座候
得共、産土之各町々民費之課出相嵩ミ、景況ニ不抱（拘）募
出難相成ニ到テ者、難黙止儀ニ御座候間、車附山鉾
七基之内三基宛隔年ニ休ミ、其費九十円ヲ当番之
車附四基江分賦シ相務候ヨリ他事無之様存候
間、何卒御公許被成下度、依而添書仕候也

神事世話掛
土田作兵衛㊞
村田五兵衛㊞

明治十年六月廿九日

産土該区
正副区長　御中

」

（B⑤）

助費増金之儀山鉾町々ヨリ依頼之写

依頼書

八坂私祭ニ付例年山鉾町々江請取申候助費之儀、
明治五年以来従前之地之口米課出ヲ廃シ、公平
之分賦を以、氏子四百三十余町各金壱円宛課出シ
神事入費ニ配当相成候ハ、其砌各区々長御中決議
之旨承知仕居候、依而鉾町ハ金三拾円、曳山ハ廿

」

七円、或ハ廿三円、曳山町ハ金八円、神僮有之町ハ別
ニ弐円請取、神支勤来候得共、実ハ鉾壱基ニ付
例年七八拾円之入費有之、各四五拾円之募集、其町分
ニ而相賄居リ、且年々修繕之入費不少、山鉾町何れも
借財相嵩ミ、永続之目的相立兼候ニ付、助費増之
儀昨年神事前ヨリ御依頼申居、又過日御会議
之節、昨九年御府庁へ差出候入費調書写を以
御公許相受候処、衆議御一決不相成、先従前之助費
ニ而可閣之旨伝承仕候、此分ニ而者年々疲弊ニ
立至り、後年山鉾保存之見込難相立存候、依車
附山鉾七基之内三基ツヽ順次ニ相休ミ、当番之
四基江全額融通致相務候ハ者如何哉与被存候得
共、府下之景況、他国之見聞も可有之候間、是
非を決せす候、此儀御公論仰度候ニ付宜御尽力
之程、偏ニ御依頼申候也

長刀鉾町　総代　内田源助㊞
函谷鉾町　総代　一井政七㊞
月鉾町　総代　小野清三郎㊞
鶏鉾町　総代　芥川猪兵衛㊞
放下鉾町　総代　山内新助㊞
岩戸山町　総代　青木四郎次㊞
観音山町　総代　中村伝兵衛㊞

」

神事当区御中
追啓

鉾町入費之儀、本紙之通申立候得共、尚其外神僮
及禿勤務之入費者、大半擔当之家より相賄候
得共、是非三拾円以上ニ者至り可申歟、実々永
続之為、費ヲ省キ候ニハ木偶之町分茂有之候
間、当町分茂木偶ニ可致哉、是又大ニ景況外
見ニ閣シ候事故、何共決議難致有之候、依而
此儀茂御公許被成下度候也

長刀鉾町　総代　内田源助㊞
月鉾町　総代　小野清三郎㊞
放下鉾町　総代　山内新助㊞

」

明治十年六月

神事当区御中

（B⑥）

一昨九年神事当区江差出候助費増方依頼書

之儀ニ付、本月廿日山鉾町総代三名、各区御会

議之席へ入費書上之控相携推参致、重而御
依頼申述候処、各御厚配被下候得共、尚当年之
処従前之侭ニ而可相勤候様仰聞ニ付、更ニ別紙
之通、御依頼書差出候、書外事情者万端御
演舌之程御依頼申入候、元来助費之儀ハ両氏
御発起ニ而出来候事故、各区御申込之段、偏ニ御
委セ申入候、山鉾町借財相嵩ミ、後年見込
相立兼候儀モ是又委細御承知之事ニ御座候、
情実之所程能御申立相顕候、神事当区
より年々金三十円以内各町へ請取、神支相勤
居候へとも、於其町自費多分ニ而遂ニ無拠曳渡相休
候様ニ立至り候而者、何共従来御尽力被下候廉
茂無之詮次第ニ付、御同前ニ歎敷存候、何卒各
町山鉾永続之為、今金弐拾円宛各町へ助費
増御周旋御尽力被下度、尤入費精々町分ニ而取
賄候者、其町之義務ニ候得共、永続相成兼候而者
氏地者勿論、府下一般之景況ニも関係可致哉、
殊ニ両氏之御尽力も空ク相成候而者、歎ヶ敷存候、
甚以申兼候得共、今一度御勉励被下、各区中江
情実貫徹相成候様御配慮之程、各町ゟ更ニ御
依頼申入候也

長刀鉾町
明治十年六月　総代　内田源助㊞
函谷鉾町

」

総代　一井政七㊞
月鉾町
総代　小野清三郎㊞
鶏鉾町
総代　芥川猪兵衛㊞
放下鉾町
総代　山内新助㊞
岩戸山町
総代　青木四郎次㊞
観音山町
総代　中村伝兵衛㊞

八坂神事世話懸
土田作兵衛殿
村田五兵衛殿

一舁山町々ゟも助費之儀依頼書有之候得共略之

（B⑦）

明治十一年ヨリ土産該区々長衆中へ依頼仕、決
議之上、壱ヶ町ニ壱円五拾銭祭費課出ニ相成
候ニ付、左之通分賦へ致候也

下京第拾壱区
区長　川勝利平
下京第三区
区長　永田孝助
私祭支務掛

」

土田作兵衛
村田五兵衛

一金百五拾円也
内鉾壱本ニ付金四拾円宛
外ニ金拾円宛神児助費
右者長刀鉾・月鉾・放下鉾三町へ渡ス
一金八拾年也
内鉾壱本ニ付金四拾円宛
右者函谷鉾・鶏鉾両町へ渡ス
一金三拾五円也
右者岩戸山町へ渡ス
一金百弐拾円宛
内山壱本ニ付金拾円宛
右者山伏山・占出山・錦天神山・孟宗山・白楽天山・
伯牙山・保昌山・太子山・油天神山・芦刈山・郭巨山・
木賊山町へ渡ス
一金三拾八円也
内金三円電信機手数心付
右者北観音山町へ渡
一金七拾円也
内山壱本ニ付金拾円宛
右者橋弁慶山・鯉山・黒主山・常(浄)明山・八幡山・
行者山・鈴鹿山町へ渡ス
一金三拾八円也
内三円電信機手数心付
右者南観音山十二年ヨリ出山ニ付当年ヨリ
該町へ渡ス
明治十三年六月ニ至リ作支向請式共高直ニ付、当
組戸長川勝氏ゟ内意も有之ニ付、本年神事
当番上京区卅組戸長浅野氏、下京区第五組
戸長村田氏エ、私祭支務懸土田氏・村田氏ゟ依
頼シテ、氏子の卅組ニ者戸長中協議之上、一ヶ町ニ
金壱円八拾五銭也、神支之課出相成候、依而左之
通是ヲ分賦ス
一金三拾円也　諸式高直ニ付増金
一同　六円也　神童増金
壱ヶ町拾二円也
右者長刀鉾・月鉾・放下鉾三町へ渡ス
一金弐拾円也　諸式高直ニ付増金
壱ヶ町ニ拾円也
右者函谷鉾・鶏鉾両町へ渡ス
一金弐拾壱円也　諸式高直ニ付増金
右者岩戸山・南北観音山三町へ渡(ス)
一金四拾円也　諸式高直ニ付増金
右者占出山・山伏山・孟宗山・錦天神山・
白楽天山・伯牙山・郭巨山・保昌山・
芦刈山・木賊山・太子山・油天神山・
橋弁慶山・鯉山・常(浄)明山・黒主山・八幡山・

行者山・鈴鹿山町へ渡ス

一金　弐円也　　諸式高直ニ付増金

右者傘鉾町へ渡ス

（C①）

追加

前之冊ニ載ス一新之際迄ハ祇園会庶祭雑色擔任ニ而其権
勢盛ナル者ナリ、唯(維)新爾後総而廃セラレ、旧神官幷ニ神人・駕
輿丁俗ニ轅町ト称ス、是等モ被為廃ニ付、山鉾町江持寄町々之
地之口米モ元治甲子年大変後ハ不持寄、明治四年迄之間、
祇園会屢々衰廃ニヲヨヒ、最唯(維)新之際、京郡之御制法ニモ三
礼ニ山鉾祭礼之儀ハ仮旧例タリ共不相応之儀、不相成之趣被
仰爾、況也旧例弥生・端午・裏盆会・重陽等之節も被為廃旧
陋之、市民不融通ヲ歎息シ、是時勢哉、明治六年(五)ニ至り神之
徳タルヤ、五月十二日小子副区長役ニテ府庁当直ニ付承りニ出況
ニ、今日摂州難波村之者、従来祇園之神輿舁ヲ本年ヨリ
差止ニ相成、再願難聴届趣ニ付、難波村之者共無力下ル之儀
承ル、弥以テ不安儀ト心得居候処、上京廿八区々長御池之町、是
轅町也、畑嘉兵衛殿へ示談ニ及処、不及力トノコト故、胸裏ニ総区長
ニ相断、下京三区小結棚町副区長村田五郎兵衛ヲカタライ、産土　」
之各区々長ヲ集メ協議ニヲヨヒ、然シテ産土私祭之基本ヲ
起シ続々祇園会之盛ンナルコト旧例ニ弥増、既ニ明治八年
六月、御府庁ヨリ御書下ケヲ有之、八坂私祭祇園会山鉾
ニヲイテハ無比之品物有之ヲ以テ、博物館掛官吏調査之
上、可為永ク存在之旨被為仰出、此書下ハ当十区之長・第三区
之長、役場交番ニ預り之、神事箱ニ有、同年爾来御府
庁市井掛ヨリ官吏調査出張十七日祭八十五日　廿四日祭八廿二日也、維時
同年八月、七條ノ南東洞院烏丸之間停車所建築ニ付東洞
院三條電信局ヨリ東洞院通ヲ南へ停車所迄之間へ電信線
路架換之儀ニ付、右本局ヨリ御府庁へ御打合セ之御書ニ添、総
区長片山米三郎殿文面小子方ニ有之、其文面左之通

別紙書面、線路差支有無御尋ニ相成候、就而者八坂神祭
山鉾通行道筋ニ有之候条、線路ニ相成候而者忽チ差支
相成候ト相心得候間、何れの道筋へ線路ヲ換候半(ハ)、山鉾
通行之為ニ支障無之歟承度、依而即刻御出頭被下候歟、
或ハ何通ヨリ何通りへ架線ニ相成候ハ、差支無之候哉、見
込書ヲ此者へ御渡シ被成度、右両様之内御答承度候也

八月四日　　総区長

土田作兵衛殿

右ニ付、小子即答書、今般三條通東洞院電信局ヨリ、東洞院　」
通ヲ南へ停車所迄線路御架換之趣拝承仕、御国体之
御便宜ニ被為在候ヘハ、決而異存申立候儀者無御座候得共、八坂神祭
祇園会之節、山鉾通行難相成ニ付可相成者三條通ヲ大宮、
大宮南へ御架線相成候ヘハ難有可奉存候、此段御答奉申上候、
已上

下京第十一区

明治八年八月四日　　区長　土田作兵衛㊞

京都府長官宛

右線路者最初者三條通西へ千本通ヲ南へ架線在、今明治

八年八月末ニ三條通ヲ大宮ヲ南へ架線ナル也、右御国体之
御便宜ニテ如斯御詮議書ヲ以テ、祇園会山鉾之盛ナルコト挙
テ知ルヘシ、尚明治十二年八月、再応東洞院通江線路御架換之儀
東京府ヨリ御府庁へ御掛合有之、当度ハ上下京市中一般之
区長江議事ニ御下シ相成候処、上下京六社、壱社毎ニ祇園会
山鉾通行不相成而ハ市中一般之不融通ニ至ル趣、厳々歎
願書被差出、則其書類御府庁ヨリ東京江逓送ナル、其後
東京之御沙汰ニ者、詮議中従前之儀差被(被差)置之旨御命令
有ナル、当同事之歎願我等私祭之事務掛之廉ヲ以、同様ニ差出ス事也

(C②)

祭礼之節、神廉列前ニ赤丸高張提燈用ル事

神輿還行祭之節、神僮屢々致勝手ニ奉僭(ママ)祭礼之節、列ニ不加
之処、本年ヨリ祭礼之列厳ニ営度ニ付、列前ニ赤丸之高張」
弐本立度処、前年御布告ニ皇族以上ナラテハ御採用不
成被仰出ニ付、小子出頭伺候処、御上局ニヲイテ御詮議之次第、
前先候へ共、出格之儀一時神祭ニ用ヒ、尤八坂神社之紋所瓜ニ
巴ニ限ル、不許自紋、幷ニ手提燈共同断ニ可相心得候旨御指令
也、依之本年ヨリ列前是ヲ用者也

本区々長

明治九年七月三日　　伺人　土田作兵衛

(C③)

山鉾順行ニ付鬮取渡シ之事

往古ヨリ中古迄鬮取渡之儀ハ、京都所司代・町奉行壱・弐・三番之
下ニ何之守印(何之守印)名印之札ヲ用紙奉書ニ認メ、雑色是ヲ受取、鬮取
之町々へ渡ス事前冊ニ出タリ、今御一新之際ヨリ壱番ト認、在下
ニ京都府御判在ル、右御鬮下ヶ度(渡)方ハ十七日祭ハ十五日、廿四日祭ハ廿二日
御府庁便宜所ニヲイテ受ル、当日順行之節ハ四條通高倉東へ入
所也、是往古ヨリノ今ニ場所変ルコトナシ、然ルニ御一新之際、壱ヶ
年ハ如旧ニテ大年寄与唱へ、上下京之長タル者厳ニ順」
番ニ鬮ヲ収納有之処、四條通街南側ニ而甚晴々敷業
ナレハ総区長之名唱ニ至リ、是ヲイナ者其場所之人家之
内ニ而収納ナル、依テ諸人祇園会者旧例ニ勝レタリ共、決而
省間敷、併鬮取渡ハ今有哉無哉ト問合多分也、小子思唯(惟)シ、府庁之
御在判之賜物ヲ内忍ニ而収納被致事、異外分存、其旨ヲ本年
総区長局長片山米三郎殿江酒(献)り、弥従前通り密々御収
納ニ候へハ、小子共山鉾所有之区長ニヲイテ鬮取渡厳重ニ
致、人口ヲ伏キ度旨申出候処、右之次第御上局江被致上伸
候処、命令ニ御国内ニヲイテ神祭順行之鬮ヲ府庁ヨリ
下ヶ渡事無比類儀故、申出候者之乞ニマカセ、上下京総区
長・助勤共不残其場へ礼服着用ニ而出張可致、山鉾所
有之区長何れ茂列席ニ而厳ニ鬮収納ニ相成事ニ
成タル、維明治九年七月神祭ヨリ改ル事

土田作兵衛

時に明治十二年ニ至り御改正ニ付郡区長ヲ被置、上京区長松浦
利貞殿、下京区長竹村藤兵衛殿、是京都区役所之長初也、
就従前総区長被廃、右御鬮納場江御出張如何ナルコトト区
役所江伺出候処、御詮議之上ニ而上京区長・下京区長幷書
記役用掛等、総テ区役所ヨリ上下八員、其他戸長用掛

十員計出張ニ而、弥厳重ニナリタル也、右之外御一新之爾後
私祭ニ付テハ神輿之件々其他庶務之擔当候へ者、支
繁雑ナレハ、山鉾之件々之外不致記載候也　土田
右者私祭支務擔当人土田氏・村田氏之事務件々之節
筆記ヲ其侭載スル処ニ而敢テ文作之拙キヲ不可論ス
今井清修書」

（D①）

私祭期延之支

本年七月之祇園祭延月之次第ハ、当五六月比ヨリ市中流
疫盛ニテ、諸人エセ(ハ)神支・仏事等、総而其他食用魚
荷市店停止之旨被仰出候ニ付、依之彼ノ疫盛ナル国々ノ
人民入京厳々被差止、市中相慎候処、十月ニ至り病勢
漸々消滅シ、茲ニ於テ私祭之期ヲ出願ス

私祭願書写

府下八坂神社氏子祭之儀、例年七月之処、虎列刺病流行
ニ付諸神支可為見合旨御布達之趣奉拝承候、然ル
処、至当節ニ追々病勢消滅之趣奉存候ニ付、右私祭
之日当則左ニ仕度

十月廿日　吉符入
三十日　鉾建
同夜　神輿洗
十一月一日　神僮社参
同日　鉾車懸
四日　舁山建
五日　御府庁ニテ鉾山順行鬮御下ヶ渡
同日　鉾山曳初
七日　当祭日山鉾順行
同日　神幸祭礼
十四日祭之分
八日　鉾建
十一日　舁山建
十二日　御府庁ニテ順行鬮御下ヶ渡
同日　鉾山曳初
十四日　当祭日山鉾順行
同日　還幸祭礼式
十八日　神輿洗

右順序例祭之通相務申度候ニ付、何卒此段之儀御聴届
被成下度奉願上候、以上

八坂神社私祭事務掛
明治十二年十月十三日　村田五郎兵衛㊞
土田作兵衛㊞
杉浦治郎右衛門㊞
産土当番
下京第弐組
戸長近藤吉右衛門㊞
上京第廿七組
戸長西村源助㊞

京都府知事槇村正直殿」

右之通り出願候処、御聞届相成候也

右私祭期延之折柄、昨十一年六月大内御保存之趣被仰出、公園等ヲ御開キ設ケ相成候ニ付、市中一般祝事仕度罷在候処無其儀、本年ニ至、尚八坂私祭期延附而者、右祝度之儀も延期相成居候ニ付、今般八坂私祭七月十四日ノ山鉾ヲ合併シ、御苑地エ十五日曳行、十七日帰町候也

（D②）

御苑地江山鉾曳行仕度願書写

去ル明治三年　御東幸駐輦後、西京府下人々騒々致居候処、昨十一年六月、大内御保存之趣被仰出、且ッ公園等ヲ御開設ニ相成候ニ付、人々漸ク安堵仕候、実々惟愉之至りニ堪ヘス、由テ聊カ大内御保存ヲ御祝度ト相謀り居候処、本年流疫ニ付八坂私祭只今迄延日致シ居候処、愈来ル十一月七日・十四日ニ右私祭御許可相成候処、此度尊長之御方々大内御保存之儀ニ付、御上京之折柄、且又独乙皇孫之入京モ其頃ト承候間、右両祭日之事ニテ、大内御保存之御祝トシテ山鉾ヲ御苑地へ曳行仕度、左様候得ハ、実々西京之栄誉ノミナラス、皇国之外客御厚待之一端トモ相成リ候と実々好機会ニ御座候間、何卒此度山鉾ヲ御苑地へ曳行仕度、此段伏而奉懇願候、以上

八坂庶祭事務擔当人

下京区第拾壱組扇座町

土田作兵衛㊞

明治十二年十月卅一日

下京区第三組小結棚町

村田五郎兵衛㊞

右氏子当番組

下京区第弐組

戸長　近藤吉左衛門㊞

上京区第廿七組

戸長　西村源助㊞

京都府知事槇村正直殿

右之通出願候処、御聞届相成候也

（D③）

鉾山曳行順路

一堺町三条ニテ鉾山共打揃、堺町御門左リテヲ右御門内西江南御門通江出、右御門前ヲ東江寺町御門外寺町通ヲ南へ、勧業場前ヲ河原町四條・三條ト是ヨリ便宜ニ鉾山帰町仕度、就而者御苑内参路朱引之通仕度候ニ付、図面之内へ掛紙之箇所鉾山曳行之間、何卒御取除被成下度、且御水路石蓋之御場所御用意被為在被下度候得者、難有可奉存候間、此段奉願上候、以上

八坂神社産土私祭支務擔当人

土田作兵衛㊞

明治十二年十月三十一日

村田五郎兵衛㊞

下京区第二組

戸長　近藤吉左衛門㊞

上京区第廿七組
戸長　西村源助㊞

京都府知事槇村正直殿

（D④）

御苑地へ山鉾曳行日限御届

今度御苑地御開設大内御保存之御祝賀仕度ト
相謀居候所、来ル十五日、右大内御保存右為御祝賀山
鉾御苑地へ曳行仕度候、若雨降ニ候ハ者順延仕度
此段御届仕候、以上

八坂庶祭事務擔当人
土田作兵衛㊞
村田五郎兵衛㊞

明治十三年十月三十一日

右氏子当番組
下京区第二組
戸長　近藤吉左衛門㊞
上京第廿七組
戸長　西村源助㊞

京都府知事槇村正直殿

（D⑤）

御苑地江山鉾曳行之儀ニ付懇願

今度御苑地へ山鉾曳行義ニ付諸入費予算之儀、粗
申上置候処、産土該町ヨリ課出可相成協議相整候
ニ付、追日車方作支、其地人足方へ段々及引合ニ候
処、短日之折柄、例祭曳行順路トハ凡三倍有之
由申立居候、折柄支宜ニ寄候へ者、十五日ハ御苑地ニ
駐在可致哉ニ承知仕候ニ付而者、費用両日ニ渉リ前
予算トハ余程相嵩、心痛罷在候ニ付而者、此度御
苑地参入之儀者申上迄モ無之候へ共、市中一般之
人民為御祝賀山鉾ヲ曳行可仕趣意ニ基キ、何
卒産土外之上下京右町々ヨリ壱人ツヽ加勢トシテ
助費御差出ニ相成候様御懇命被成下度、此段只
簡懇願仕候、以上

八坂神社庶祭事務掛
土田作兵衛㊞
村田五郎兵衛㊞

明治十二年十一月

右之通相違無之候也

右産土当番組
下京区第二組
戸長　近藤吉左衛門㊞
上京区第廿七組
戸長　西村源助㊞

下京区長竹村藤兵衛殿

（D⑥）

御伺書

今般御苑地御開、且大内御保存被為有候ニ付而、人民為奉祝
八坂祭中之山鉾ヲ御苑地ニ曳行仕候処、御宮様
御上覧被為有、右山鉾町々江御金弐拾円被下置、山鉾
町々一統難有頂戴仕、右御下ヶ之金額ヲ以、神祭宵山之

節、右町々装飾之神前ニ御吊之挑燈弐張宛点
燈仕度懇願申立候ニ付、不顧恐、此段御伺奉申上度
候、以上

八坂産土庶祭事務擔当人
下京区第十一組扇座町
土田作兵衛㊞
上京区第三組小結棚町
村田五郎兵衛㊞

明治十二年十一月廿二日

久邇御宮様御家使
進藤為名殿

右之通御伺申上候処、宮内省へ御伺ニ付、御詮議中当今
八坂神社紋処ヲ附、各山鉾町へ左之通相渡し候也

（D⑦）

証

昨明治十二年十一月、御苑御保存奉祝ノ為メ、山鉾曳行
之際、久邇宮御方ヨリ山鉾町中ヱ金弐拾円ヲ賜リ、其資
料ヲ以テ、永年維持スル為、幣燭提灯御調成、本
日山各町ヱ弐張、鉾各町へ三張宛御渡与相成、正ニ
致領(頂)戴、積年保護仕候、此段山鉾各町々総代連署
ヲ以テ受証差上候也

追而右提燈神支之外相用申間敷候

鈴鹿山町総代
菅常太郎㊞

明治十三年七月十一日

」

木賊山町総代
関口伊助　印
八幡山町総代
羽村佐兵衛㊞
放下鉾町総代
松本半兵衛㊞
芦刈山町惣代
橋本正兵衛㊞
函谷鉾町惣代
横山長兵衛㊞
山伏山町惣代
内藤源之助㊞
白楽天山町惣代
橋本源兵衛㊞
孟宗山町惣代
井尻忠七㊞
綾傘鉾町惣代
松見弥三郎㊞
船鉾町惣代
中井佐太郎㊞

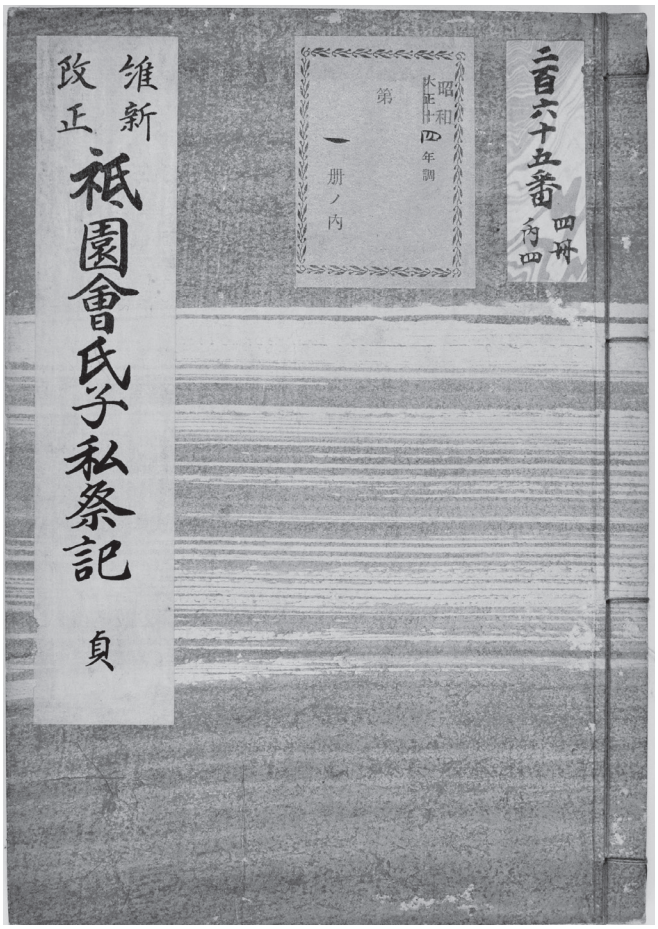
保昌山町総代
木村庄兵衛㊞
占出山町惣代
田中彦助㊞
橋弁慶山町惣代
長谷嘉兵衛㊞
天神山町惣代
山本市之助㊞
黒主山町惣代
森脇太兵衛㊞
月鉾町惣代
小野清三郎㊞
太子山町惣代
伊藤太十郎㊞
矢田町惣代
小谷佐兵衛㊞
南観音山町惣代
中村弥三郎㊞

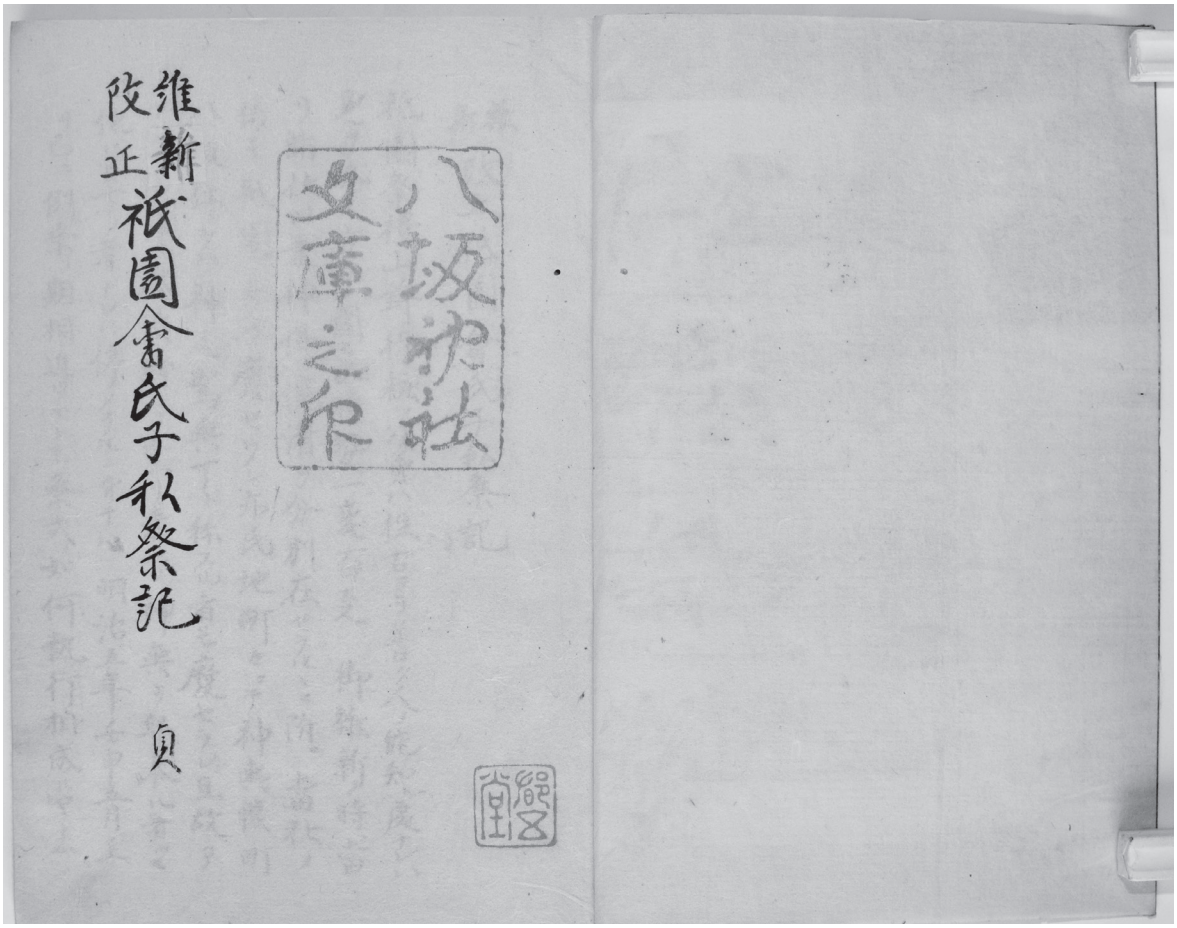
常(浄)明山町総代
清水武一郎㊞
役行者山町総代
沢永造㊞
長刀鉾町惣代
内田源助㊞
鶏鉾町惣代
芥川猪兵衛㊞
岩戸山町惣代
田中久四郎㊞
油天神山町惣代
山下新七㊞
郭巨山町惣代
西川常吉㊞
鯉山町惣代
荒木重兵衛㊞
六角町惣代
清水与八郎代理
清水又三郎㊞

神事々務係総督
土田作兵衛殿
村田五郎兵衛殿

」

「維新改正維新祇園会氏子私祭記」写真





雜

新改正祇園會氏子私祭記

祇園祭禮山鉾行粧次第ハ往古ヨリ普ク人ノ能知ル處ナレハ是ヲ略ス方今國家時勢一変百変　御維新ノ時當リ諸社旧来神佛混淆ヲ分別在セラルヽニ附　當社ノ儀モ祇園ノ号ヲ廢セラレ亦氏地町々ニテ神輿輦町ハ坂社ニテハ神人駕輿丁ト称スル者モ廢セラレ且故アツテ摂津難波村ヨリ登リ来テ神輿ヲ舁奉ル者ヲ他管下ノ者ナレハ停メラルヽニ付テハ　明治五年壬申五月ヨリ已ニ例祭ノ期相迫ツケトモ祭式如何執行相成ルヤ未

定ニテ山鉾建モ覺束ナシ其故ハ中古織田公執政ノ時代年貢ノ口米ヲ以テ神事費ニ充行ルニ依テ地ノロト称シ氏子町ヨリ山鉾町其他神事掛リニ多少モ持寄来ル例ナリシニ近年ニ至リ定額ヲ減セシ向モ在是猶ニ元治甲子年大災以後ハ氏地町々ノ景況モ移リ変リ神祭ノ費モ租暴ニ成行右地ノ口米出納ニテモ各私論ヲ言立テ不納ノ向モ少ナカラス故ニ不出ノ山鉾モ多ク

皇國ヨリ競ヲ見物ノ為メ入京ノ人モ無之氏地ハ勿論都下一般ノ賑ヲ失フノミナラス右村ニ至ル迄自ラ不融通ニ立到ルハ必然ニテ實ニ歎息ノ至リナリ爰ニ明治五年五月

下京十區副區長土田作兵衛御府廳ニ出願ノ處上京九區區長畑嘉兵衛及當番諸合ヲ右畑氏ハ後来輦町住ノ古老ニテ氏神祭神輿舁ノ事如何ナル（キヤト相尋ル処畑氏答ヘ其之ノ趣就テハ副區長富永太右衛門及モ輦町住ヨリ如何申居ルヤト尋ネ是以貴説ト同シ由相答ル所畑氏亦云昨年一旦神人駕輿丁モ廢セラルヽ上ハ今復旧輦町ヨリ取扱ノ事悖リ乾モ角モ富永氏ト合議シハ坂神宮モ示談致スヘキ趣申サルヽ依テ答テ云貴説誠ニ止ヲ得カタシト雖モ此節難波村ヨリ旧例ノ申立上京奉役致度　當御府ニ出願致ス雖モ故ニ御聞届

無之由何分来月ノ例祭今日ニ至リ取ト留メサル事モ無之テハ
今年ノ神祭執行ノ意元ナシ依テ僕ノ愚按ニ當時様町ノ
廉モ無之故ニ從来ノ地ノ口来ヲモ慶シ神輿ノ始ノ山鉾
祭禮掛リノ入費總テ氏地町々一般ニ分賦シ持寄金及
テ祭礼ヲ修セハ公平ノ理ニテ永世不朽ナル(シ)之下老体ト
云特ニ様町ノ住ナレハ其廉ヲ以テ厚ク配慮下サレ度段
懇談及フ処畑氏ニ神輿渡御ノ儀ハ吾輩徒来擔
當セシ事ナレハ幡當年ノ祭禮ニ至テモ精ニ心力ヲ盡シ山
鉾一般ノ入費ヲ氏地町々ニ分賦スルニ至テハ意外ノ事ナリ
當今ノ時体右様之儀申出シ萬一御譴責ヲ蒙事
アラハ何ノ益カ有ラン吾此儀ニ同意ナレカタシト依テ僕亦如
何トモ為シ方ナシハ胸裏ニ決案シ独断ヲ以テ總區長
舩橋氏遠藤氏其外某々ヲ申出ニハ来月氏神
祭礼ニ前剣ヲ畑氏ト議論致ス処総テ依テ
僕氏地ノ區長中頼談致度ニ付萬一御府廳ノ
上聞ニ達シ如何敷思召サシ名君ニ御汐太ニモ
有之前ノ僕壱人御召出シ成シ下サレ度左ル時ハ
愚存具ニ言上仕ル旨申置退出ス然ルニ下京
第三區副區長村田五兵衛殿ハ從来山鉾地
ノ口ノ儀ニ付心配致シ居ル事有之ニ付右村田氏ニ
相訪今朝ヨリ御府廳詰所ニテ畑氏ト議論ノ趣且總區長
衆ニ申置ル始末具ニ面語シ因テ愚存ニハ好機會ナレハ從
前ノ地ノ口ヲ廃シ氏地一般ニ持寄金ニテ祭禮執行致シ
度ニ付日氏地ノ區長衆ヲ十壱校ニ招集シ合議致シ度
ニ付足下モ萬端奮發助力致シ呉シ度談シ置ヲ
當永氏ニ出向前件ノ始末委細ニ面語致ス所畑氏ノ申
条様町ノ存意モ如事故サシハ違存ナリトヲ亦下京第
十區區長松島ヲ七郎ニ出向前件ノ次第委細説話シ萬
端配慮且指揮ニ預リ度申出ル處松島氏ニ此意ヲ合
議スルニハ我十區以東ヲ後ニシ以西ノ各區ヲ先懇談シ
其摸様ニテ氏地一般各區長招同會議ナハ然ル(ヲ)カ方ト僕
大ニ此議ニ服シ則チ五月廿四日十壱校ヲ以テ上京廿六區副區
吉川氏下京壱區ノ長矢田氏同副區長上田氏下京二區ノ
長木村氏同副區長澤渡氏下京九區ノ長高木氏下
京十區ノ長松島氏下京十二區ノ長瀬氏及富區長富
永氏等招會シ村田氏僕両人會主故両人ヨリ各君ニ頼
談ニ達ス主意ハ日前来月八坂社神祭ノ儀ニ付從来神
輿ヲ取扱フハ様町ナリ然ルニ昨年神人駕輿丁廃止ヲ
ハ上ハ當今旧様町ヨリ執成モ致シ難シト雖モ畑氏富
永氏ハ旧様町住故殊ニ盡力是アレトモ各町ヨリ持寄ル(キ)

地ノ呂ニ納メサル向モ不少就テハ山鉾出サル町モ多ク古様神
祭衰廃致ストキハ都下不融通大方ナラス甚以歎息ノ
至リナリ依テ如何ニモ考シテ祭儀復古ノ如ク執行シ度ク
テハ至急ノ申立ナレトモ當年ヨリ復来ノ地ノ呂廃シ神輿渡
御人費ヲ始メ山鉾其他神事掛リノ諸人費更ニ氏地町
々一般ニ分當シ永世不窮ノ祭儀執行致度旨陳述セシニ
各々度祭費ヲ尋問スル答ヲ曰先祭礼神輿渡御ノ人費
金百円鉾一基ニ付人費金五十円山一基ニ付人費金十二
三円ト見積リ氏惣計大数五百町ニ付テ計算セハ可ナル
ヘキ旨答ル處諸居計算シテ大凡壱町金壱円三拾
銭ニ當ルヲ云然レトモ其町数ノ精粗ヲハ四百三十五町ヨリ依テ
紙議シテ云當年ノ今日ニ至リ斯ノコトキ大望處ニ付合力タシト
時ニ高木氏断テ云神輿渡御ノ人費ノ儀氏地中ヨリ持ヨリ
執行ヘキハ至當ナリ山鉾ノ人費ニ至テハ迚モ行届キカタシト議
論一定ナス然リト雖モ都下ノ賑ハヒヨリ山鉾ニ出ル事ナレハ
猶再三熟議ノ上今日集會ノ各居ヨリ其モヨリノ各區ニ前
議ノ始末具ニ傳説シ倶ニ勸奬ノ議懇ニ依頼シ村田氏
儀ハ今日集會無之各區ニ頼談致シ再ヒ来ル十一日氏地
各區正副區長中當十壱區ニ請招シ會議致度段
約定シ一同退會ス依テ其翌日ヨリ村田氏儀ハ氏地各區ニ
奔走シ頼談及説ク其日ニ到ル德會議ヲナストコロ紙論紛々ニテ議
服セサル區モ三四名アリシカ大概壱町金壱円ト見積リヲ以テ
各區町々ニ説諭イタシ其上返答致スヘキ旨ニ付何分前
議協同無之時ハ不得止山鉾ノ石出町ニ不少ニ付承諾ノ
有無ニヨリテ山鉾町ノ心得モ有之事ニハ十四日限リ封書ヲ
村田氏方迄確答致下度段約定致シ今日會ノ退出ス
今日集會人数氏地上下京ヲ合テ十六區ノ正副區長並ニ四
拾町ヨリモ出會シテ德人数八十七人ナリ然ニ十四日ニ到リ再
復協同ノ旨封ニシテ答来ル方大凡半通リニテ其餘ハ有
無ノ答ヲモ未タ依テ未村田氏ト復書ノ答ヲ未タサル
向ニ頼談及説ク其日ニ到リ德會協和熟議相調ヒ良
刻願出案取調復ス紙區長船橋氏相断ル七日本
願面各區正副區長連署調印シ十八日　府廳ヘ上呈ス
然ニ昨今　主上御入京駐驛中ニテ　御府廳モ
特ニ御多端ノ折柄ナレハ晦日上局ニテ古願書御披覧
相成度旨課吉井殿御取扱ニテ古書面之趣相違無之
ニヨリテハ紙區長連印ヲ可言付旨有之ニ依テ乃チ
在勤紙區長熊谷久太郎及長尾芝吉及舟橋清九
郎門及等連署調印シ再ヒ上呈ス所願ノ趣　御德
面相成候段　御書下願戴ス誠ニ當有事件萬

端陪従等ヲ速ニ許シ素ヨリ偏神慮ノ賞助ニ依ル
事ニ又各区長衆ノ配意且各町懇和協同尤カノ
我ヲ所ヨリ右願書ニ御書下御割印有之本紙ハ
最初奮勇建議ノ故ヲ以テ下京三区同十壱区等ノ
両役ニテ隔年交番ニ是ヲ預ル事ニ定ル　神幸富番
二区宛ト定ル幸ハ明治六年ヨリ始メニ廻取テ富年
ハ　同七年ハ以下ノ各町々ニテ神幸ノ入費金ヲ集メ区ヲ
五月廿日迄ニ富番ノ校ニ持寄ル日ハ富番ノ校ニヲ
イテ下京二区同拾壱区ヨリ正副区長ノ中壱人ヲ
立會預リ金山鉾町々ニハ三校十壱校隔番渡方

我ニ右者都下衰微ニ到ル而ヨリ希望スル主意ナレハ山鉾町々我意
ヲ不申立例年懈怠ヲ山鉾ヲ出スヿ有ル結約ヲ怒ル共萬一
今後其町ニ苦情有テ山鉾出シ難キ時ハ必氏地各区長共
其次第ヲ取ヲ以テ断ル出ル（ニ）若各区長エ申出ル者ハ
アラハ其区内ニテ懇ニ助費金ヲ以テ可成援我ニ祭礼
々行列ニ成ル事ヲ無之援希望スル者也

前条願書之写

八坂神社氏子祭式之儀ニ付願

一八坂神社氏子祭式行粽入費之儀後東氏子町ヶ地

元年五月廿五日

上京六区
区長　遠藤義名衛門
副区長　吉川吉次郎

同　六七区
区長　古橋兵庫
副区長　森　治郎

同六八区
区長　畑　嘉名衛
副区長　山口仙之助

同六九区
区長　野村源名衛
副区長　多田伝名衛

同七〇区
区長　田中松之助
副区長　道江嘉名衛

同世壱区
医長 富永武左衛門
副医長 三浦清助
同第壱区
医長 矢田徳左衛門
副医長 上田寅吉
同第弐区
医長 木村小兵衛
副医長 近藤吉左衛門

同第三区
医長 森川吉太郎門
副医長 村田五兵衛
同第四区
医長 須羽義左衛門
副医長 長野清二郎
同第五区
医長 太田平治郎
副医長 玉尾與兵衛

同第六区
医長 吉田伝助
副医長 高木喜兵衛
同第七区
医長 三宅富治郎
副医長 原田忠兵衛
同第九区
医長 高木喜治郎
副医長 西田善兵衛

同桧区
医長 松嶋與七
副医長 栗原吉兵衛
同桧壱区
医長 富永太郎左衛門
副医長 上田伝兵衛
同桧弐区
医長 長瀬多兵衛
副医長 矢部吉兵衛

同拾三区
区長 波多野信吾衛門
副区長 長谷川治兵衛

同拾四区
区長 植村七兵衛
副区長 熊谷市郎兵衛

同拾五区
区長 杉浦治郎右衛門
副区長 井口長左衛門

同拾七区
区長 川本清造
副区長 河口治郎兵衛

同拾八区
区長 安川九兵衛
副区長 篠原忠四郎

同拾九区
区長 内田孫兵衛
副区長 前田義兵衛

同廿区
区長 藤岡惣右衛門
副区長 山田伊助

同廿二区
区長 平居喜左衛門
副区長 小澤權左衛門

前書之通中出相違無之候ハヽ奥印致シ候

総区長
熊谷久左衛門

長尾小兵衛
飯塚清左衛門

京都府
御廳

右之通連署調印名出願致候ハヽ而ハ四書之
項或ハ多也
嗚呼百度一新之時ニ際會シ當社私祭之儀ハ
改定シ従前之地之口ノ歩ハ氏地町ヨリ公平ニ
分賦出金ヲ以永世不朽ニ祭式ヲ修セ候事敬

神之道ニモ叶フベシ苟モ従爰ニ者弘情ヲ去
精實神ニ仕ヘ心ヲ以テ其役ヲ務ムベキ也

明治五年壬申六月　　東京芳十壱区
　　区長　土田他衛記

明治六年ヨリ同十年迄右之通山鉾、氏子町
々ヘ助成金渡ス

一金三拾四円宛
　　外ニ金弐円宛神児助成
右ハ長刀鉾月鉾放下鉾三町ヘ渡ス

一金三拾四円宛
右ハ函谷鉾鶏鉾両町ヘ渡ス
一金弐拾三円也
右ハ岩戸山町ヘ渡ス
一金八円宛
右ハ芦刈山占出山地蔵山太子山白楽天山伏山
伯牙山郭巨山孟宗山錦天神山木賊山保昌山
土蜘町ヘ渡ス
一金弐拾四円也
　　外ニ金三円宛代地ヘ渡ス

右ハ観音山町ヘ渡ス
一金八円宛
右ハ橋弁慶山鯉山常明山鈴鹿山行者山黒主
山六町ヘ渡ス
明治八年ヨリ八幡山出山白楽天山平井山三町ヘ渡ス
一明治八年六月五日金壱円弐拾五銭ヘ渡ス
　　神変奥ノ院町ヘ渡ス

明治十年官ヨリ助成金ヲ下ル
　　内金拾五円　　十年ヨリ鉾町ヘ助成
　　嘉永年間建立ノ書付ニ右通ニ付記ス

一金拾六円也
　　但鉾元ヘ金八円宛
右ハ函谷鉾鶏鉾両町ヘ渡ス
一金三拾九円也
　　但鉾元ヘ金八円宛
　　外ニ金五円宛神児奥
右ハ長刀鉾月鉾放下鉾三町ヘ渡ス
一金拾四円也
　　但ニ金弐円宛
右ハ岩戸山出観音山両町ヘ渡ス

一金拾九円也

右之通私祭費之内

八坂神社私祭祇園会日誌

七月一日　吉村入之式後前之通

七日　鉾之神僧社参之事　午前

十日　神輿洗　午后十時

同日　鉾建

十一日　鉾車懸　午前十時

十四日　山建　午前六時

十五日　御庁廳於て国取山鉾巡行之変

同日　鉾曳初　山舁初　午前十時

十七日　番傘日山鉾巡行　午前七時

同日　御神輿御旅所迄行幸　午後四時

八日　鉾建

十一日　山建

十二日　鉾曳初　山舁初

同日　御庁廳国取山鉾巡行之

十四日　番傘日山鉾巡行　午前七時

同日　御神輿還幸　午後二時

十八日　神輿洗　逐物也　前十日同

右毎年例祭定日也

明治九年　私祭支務掛　（土田）（田村）

右之通私祭之日順序各区町ニ通知致候

一八坂神社ニ付過日来度々公議之上商議之事八需

例国三て祭式勅令定之ニ付明治九年来

神役之町村ニ出張之事不得止変情之

条々ニ失費等之儀為ニ度て自然ト衰廃ニ場

合ニ陥ル事ハ第一ニ祭式ニ於ケル所ノ欠ヲ

ニ付ス就テハ町ニ於テ別紙書面内願之上

可伺之旨ヲ以テ祭役町村ニ商議ヲ申諭ス

ヲ以テ是迄ノ少年ヲ以テ後也

神事当区
氏子総代ニ長
川勝利平（印）

産土各區ノ長

別紙山鉾町ノ之

添書

別紙之通山鉾町連署調印ヲ以テ應シ依頼書拙者等ヲ
差出ス旨相申ス者元治元甲子年大災之以後氏
地町ノ景況ヲ移変神祭等モ粗暴ニ成行都下景
況ノ失ヒシト大當祇園會ニ限リ往昔ヲ産土町ノ地ニ来

ト称シ其樹ノ米金ヲ持寄祭儀ヲ執行ス慶甲子年寡後
右持寄ノ定額ヲ減シ私論ヲ申立不納之向モ打ナカラズ不出
ノ山鉾ノ多ク故見物之多ク諸国ヲ入京之人民ヲ無之氏地ハ
勿論都下一般之賑ヲ失ヒ村在ニ至ル迄自ラ不融通ニ立到リ
シ故ニ産土該區ノ長中合議協同シテ祇園祭ハ
神事之事務計ニ有之都下之景況ト諸高業ニ
係リ実ニ能ク勘弁ナラズ不相成ト協議ニ先該
祭諸入費之見込相立ル前悉ク其費ニ充テント雖モ両
度神輿渡行祭禮之入費金百円車附ノ鉾壱基ノ金
五拾円舁山壱基ノ金十二三円但シ鉾五基曳山弐基

舁山壱基未出ハ紀鉾観音車ノ今鉾武者ノ之助費其外諸掛總計
六百五拾円余也是前議之見込氏地冒ル金円ニ分賦セ
ハ壱円五拾銭余ニ相成其年五月廿一日集議ナレハ當祭期ニ
近キ今日ニ至リ期之如キ大望遠ニ打合ヲモ追テ議スル先
當年之處壱ケ町壱円充之出額ヲ以テ可相賛旨各區
ヲ協和熟議相調ヒ即刻願書相認産土各區正
副區長中連署調印ヲ以五月廿八日御府廳ニ上呈然
ルニ昨今
主上御入京御駐蹕中ニテ御府廳特ニ御多端折柄

ナレハ明日御上局ニテ右願書御披見相成書面之
趣相違無之ニ於テハ総區長連印ヲ可致旨御沙汰
ニ付ク乃チ在勤德區長熊谷久左衛門及長尾小兵
衛両名相清左衛門殿等連署調印ヲ以ニ上呈相成
左右願之趣御聞届相成件書下願致仕度儀者
各區ニ於テ御兼知之事也然ルニ前件協議之前
神輿渡行祭禮費ノ始ノ諸費之内何ヲ義不充雖モ
又不足不多ク唐門車附山鉾ニ之費ニ限リ多分之不足
ニ相成ル故別紙鉾一町ノ助費增シ概出ル者不得
止之儀ニ御座前件今議之前相清氏地ヲ北支務ニ

舟山七基未出ハ（紀舟觀音事有今舟武本ノ場狼山ヲ）基外神典之丁人足遣
又料ヲ屋町ヨリ出ス鉾武者ヲ之助費其外諸掛總計
六百五拾四余也是前議之見込氏地置代金町ニ分賦セ
ハ壱円五拾銭余ニ相成其年五月廿一日集議ナレハ當祭期
近キ今日ニ至リ期之如キ大望遂ニ打合ヲ追テ議定ル先
當年之處壱ケ町壱円宛之出額ヲ以テ可相務旨各區
々協和熟議相調ヒ即刻願書相認ヲ產土各區正
副區長中連署調印ヲ五月廿八日御府廳ニ出願然
ルニ即今
主上御入京御駐蹕中ニテ御府廳特ニ御多端折柄
ナレ共 晦日 御上局ニテ右願書御按見相成書面之
趣相違無之ニ於テハ惣區長連印可致旨御沙汰
ニ付ヲ乃チ在勤德區長熊谷久左エ門及長尾小兵
衛及舟指清左エ門及等連署調印ヲ舟ヒ上呈相成
左願額之趣御聞届相成御書下頂戴仕候儀者
各區ニ於テ御兼知之事也然ルニ前件協議之高
神典渡行祭禮費ヲ始ノ諸費之内何ヲ義不容難モ
又不足不多ヲ居其内車附山鉾之費ニ限リ多分之不足
ニ相成ル故別紙鉾一町ヒトリ助費壱ツ宛出ス者不得
止之儀ニ御座ル前件今後之為 拙者民地ヲ以支務ニ

擔當致度得共固ヨリ我等鉾町之居住故其鉾町ニハ多
カラス其相當之助費金陸ヲ申募ル度不可然最前見
込鉾入費五拾円ト見ナシ居ル全多カラサル處ニテ實度
出鉾入費多分之募出有之度故今般拙者民ニ迫リ度ル
車附七基ハ助費壱ツ金壱円宛舟山七基ハ金貳円宛
壱ツ方之儀ハ不得止拙者ヲモ依頼申度度右之節ニ
第ヲ申置度ル久世村神僧ハ當度ヨリ金貳円五拾銭
馬代ニテ渡方シ度各區御中御協議之下度第
ヲ御兼知之通當祭者神変ヲ已ニテハ無之部下
之景況ト諸高業之融通ニ抱リ度次第ニ御座候

得共產土之各町々民費之課出相嵩ニ景況ニ不抱易
出難相成ニ到ル者難黙止儀ニ御座候間車附山鉾
七基之内三基宛陳年ニ休ミ其費九十円ノ當番之
車附四基ハ分賦ニ相務度ヨリ他事無之樣存候
間何卒御洋ニ御下度偽添書仕候也

明治十年六月廿九日

神事世話掛
土田仁兵衛㊞
村田五兵衛㊞

產土該區
正副區長
御中

助費増金之儀山鉾町江依頼之事

依頼書

八坂私祭ニ付例年山鉾町江請取申ス助費之儀
明治五年以来経費不足之ニ付課出之儀ニ付年
之経費氏子四百戸金可者金壱円宛課出之
神事奉賛之祝儀ニ付長吉中決議
之旨ニ付依頼ス 鉾町江金三拾円宛出ス
商或ハ之商鉾ハ金八円神輿方之ハ別
ニ助円請取神事ニ付年ニ鉾ニ付

例年七八拾円之人費ニ者四五拾円之寄集ニ付
ニ相賄居リ且年ニ繰結之入費不足ニ鉾町江
依然相賄之ニ不足之目的相立ニ付助費増
儀ニ付年神事奉賛ニ付依頼ス又過日ニ付金儀
ニ付ニ九年 所庁廳ニ差出ス入費調書ニ
付公許之儀ニ 最後ニ決定之経費ニ助費
ニ可願之旨傳聞ニ付ニ年ニ神輿
之儀ニ付年ニ鉾 保証之儀 依事
ニ付鉾七基之内 之基ニ理由相休之旨書ニ
四基ニ金額融通致ス儀ニ如何ニ成行ニ

当庁下ニ差況他ニ之ニ可ニ丁寧ニ及問ニ
那と決ス儀ニ付公論作成ニ付宣ニ書ニ
ニ付偏ニ御依頼ニ為

長刀鉾町
総代 内田原助 ㊞
函石鉾町
総代 一井政七 ㊞
月鉾町
総代 小野清三郎 ㊞
鶏鉾町

総代 茨川精之衛 ㊞
放下鉾町
総代 山内彩助 ㊞
岩戸山町
総代 吉末四郎次 ㊞
観音山町
総代 中村傳兵衛 ㊞

神事奉賛世話人

追記

鉾町入費之儀本紙之通申立候ハ甚尚其外神僧
及香勧物之入費ハ大半拵番之家より出賄
候ハ是非之儀ハ因之至ハ可申ハ実ハ永
積之為費ハ着ハ仕ハ本儀ハ町名有之ハ
同商町ハ本儀ハ可致ハ是又大ハ景況ハ
見ハ図ハ仕事数何ハ決儀難致ハ仕ハ
此儀ハ内ハ評ハ仕ハ

長力鉾町
役代 内田 源助

月鉾町
役代 小野清三郎

明十年六月

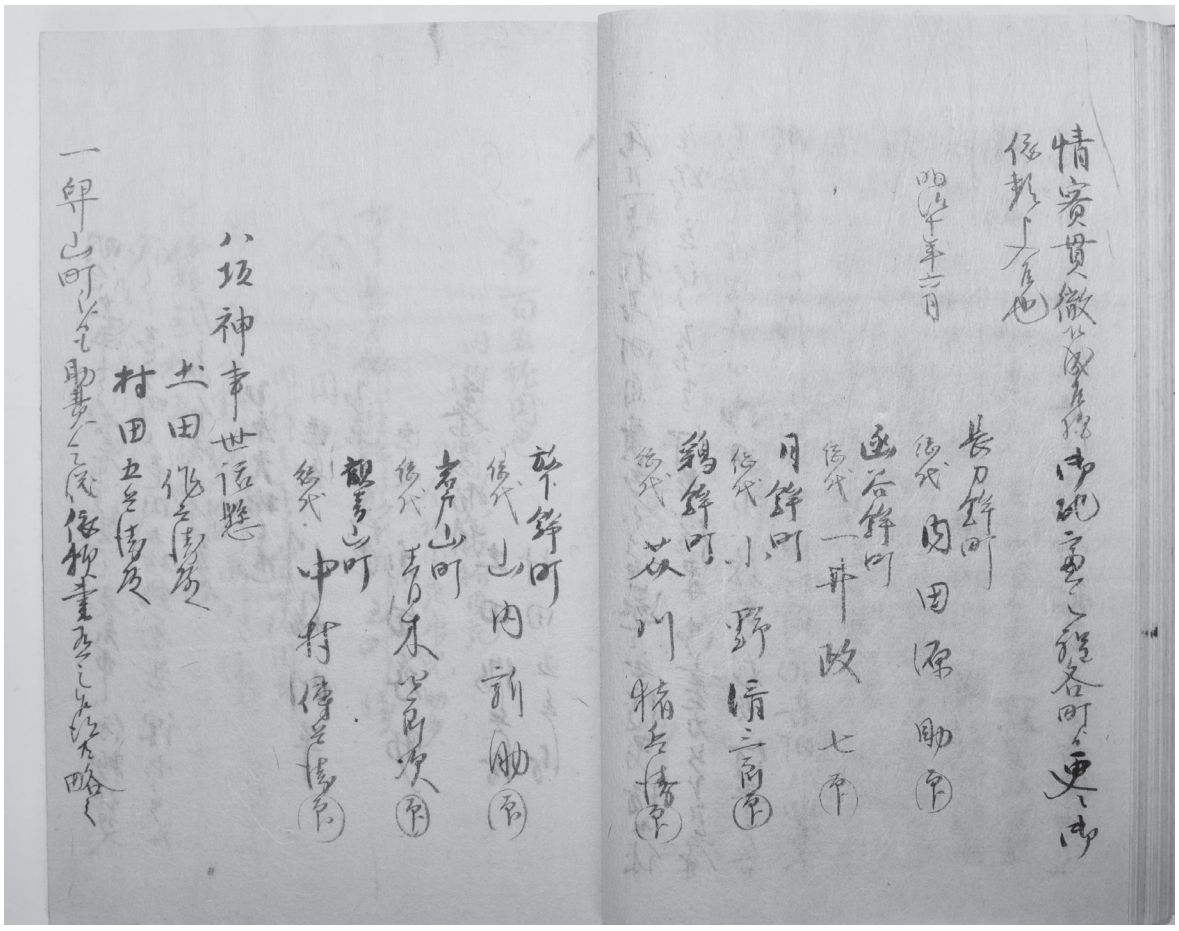
放下鉾町
役代 山内新助

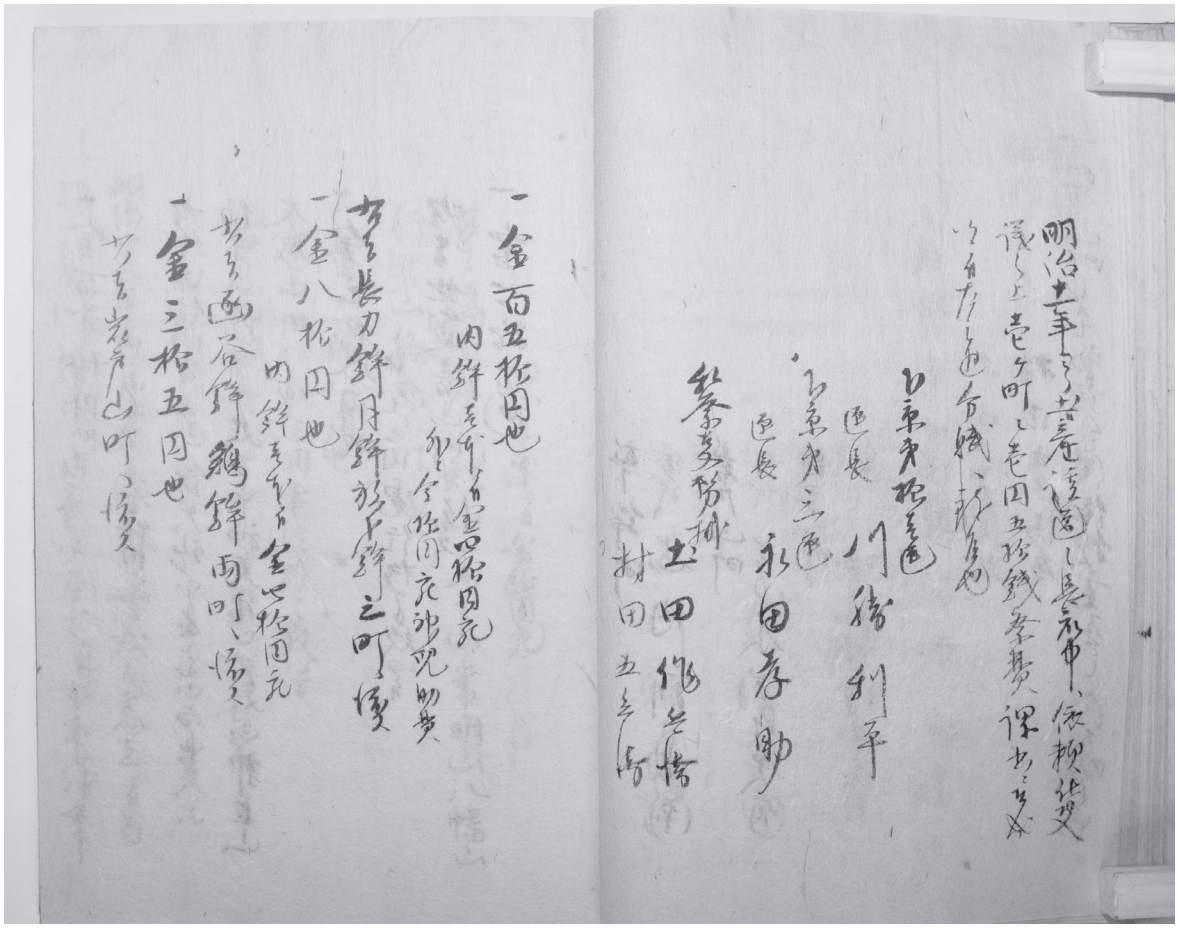
神事番匠中

一 明九年神事番匠ハ記ハ助費ハ町ハ
仕ハ 右月廿日ハ鉾町ハ代名各匠中ハ
儀ハ席入費書ハ如相渡ハ番匠中

伝教中ハ仕ハ各中ハ
居住ハ商ハ
居住ハ商ハ可ハ勤ハ
通中伝教書ハ書ハ中情ハ
信ハ中伝教ハ
書ハ中助費ハ
中祭ハ
垂ハ人ハ 山鉾町借賃ハ
ハ人ハ細ハ
情実ハ所 経ハ中ハ 神事番匠
ハ年ハ全ハ内ハ各町ハ情ハ神ハ

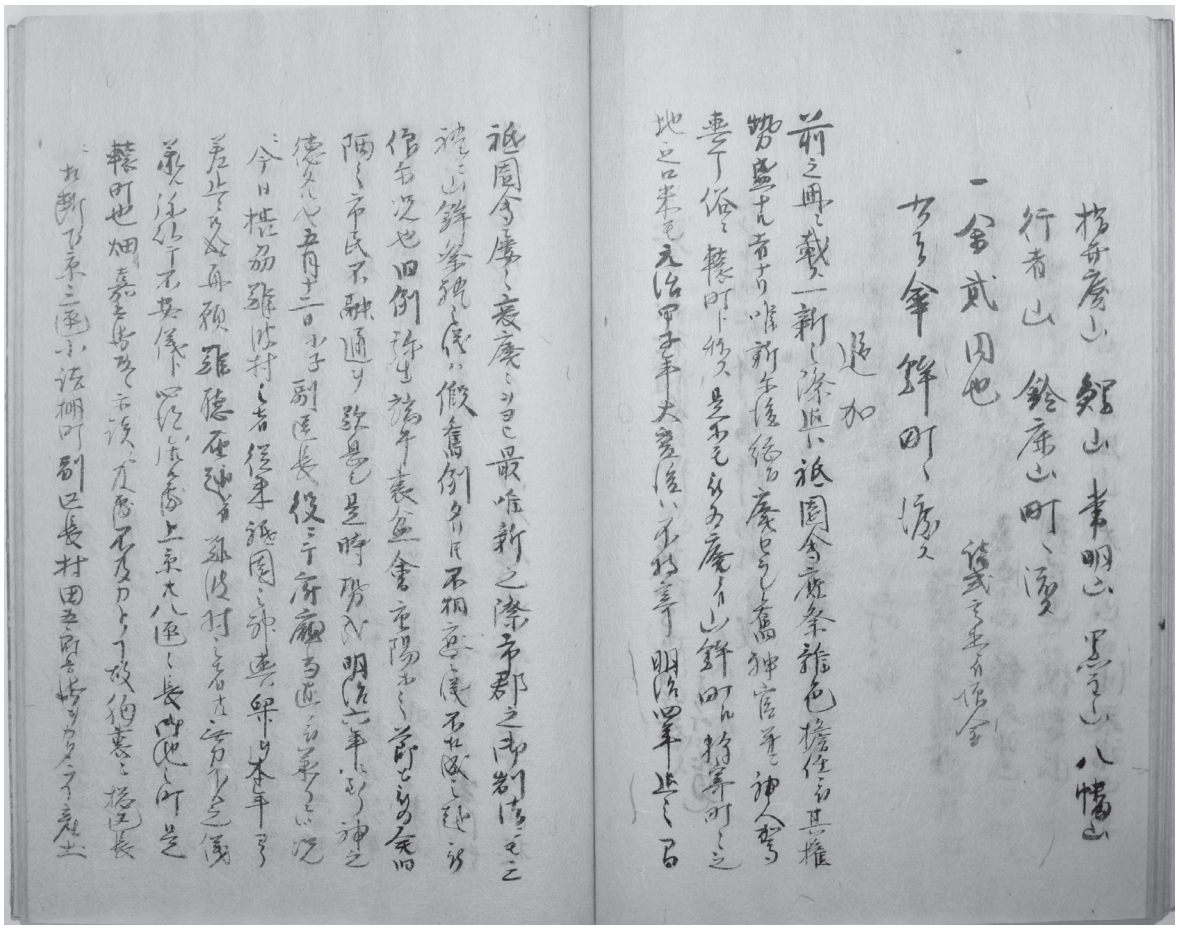
居住ハ町自費ハ遂ハ
ハ町ハ何ハ 仕事中書ハ
ハ何ハ 何年各
町ハ鉾ハ金ハ因ハ各町ハ助費
ハ中ハ ハ入費ハ町ハ
ハ町ハ義務ハ
民地ハ商ハ一般ハ景況ハ関係ハ
弾ハ両氏ハ中書ハ
ハ中ハ一層ハ勉励ハ各匠中ハ

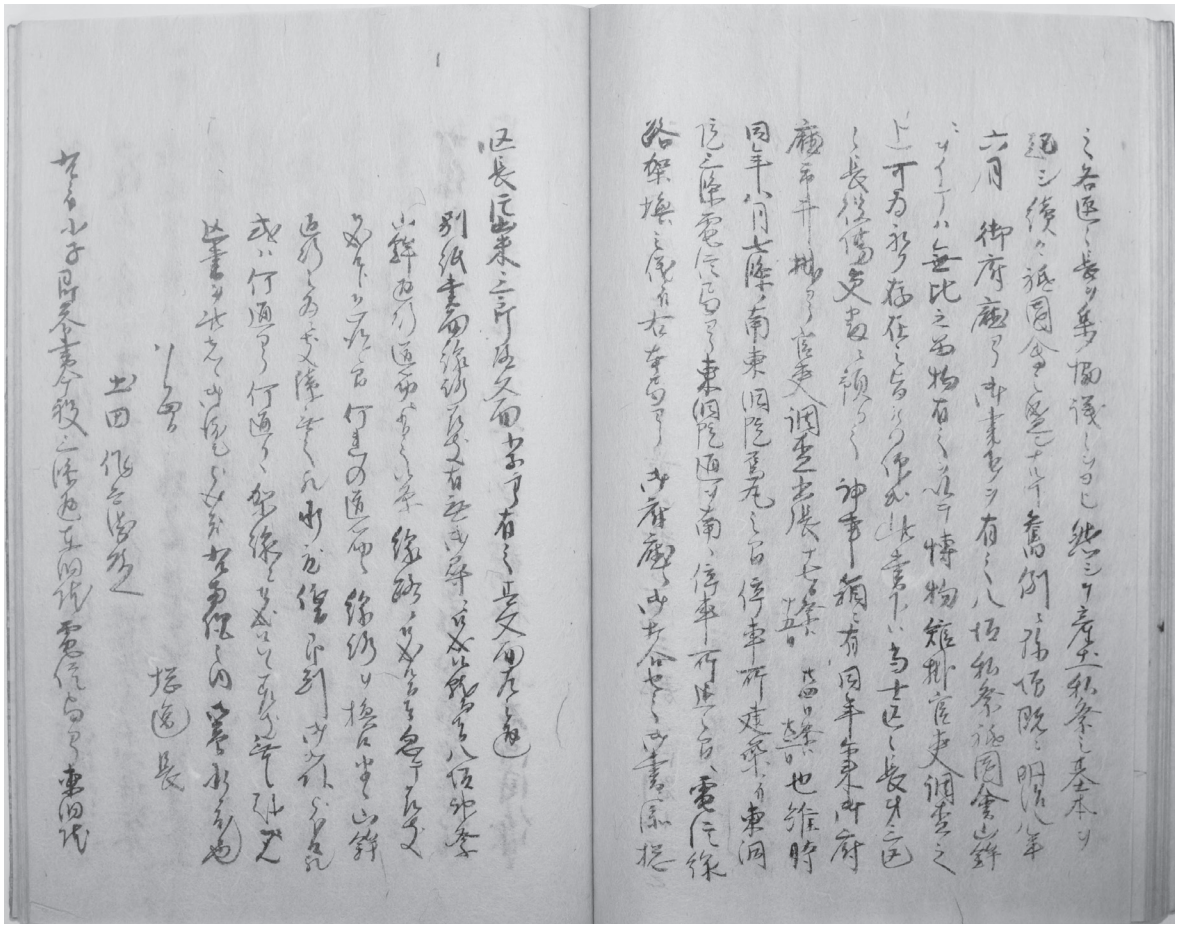


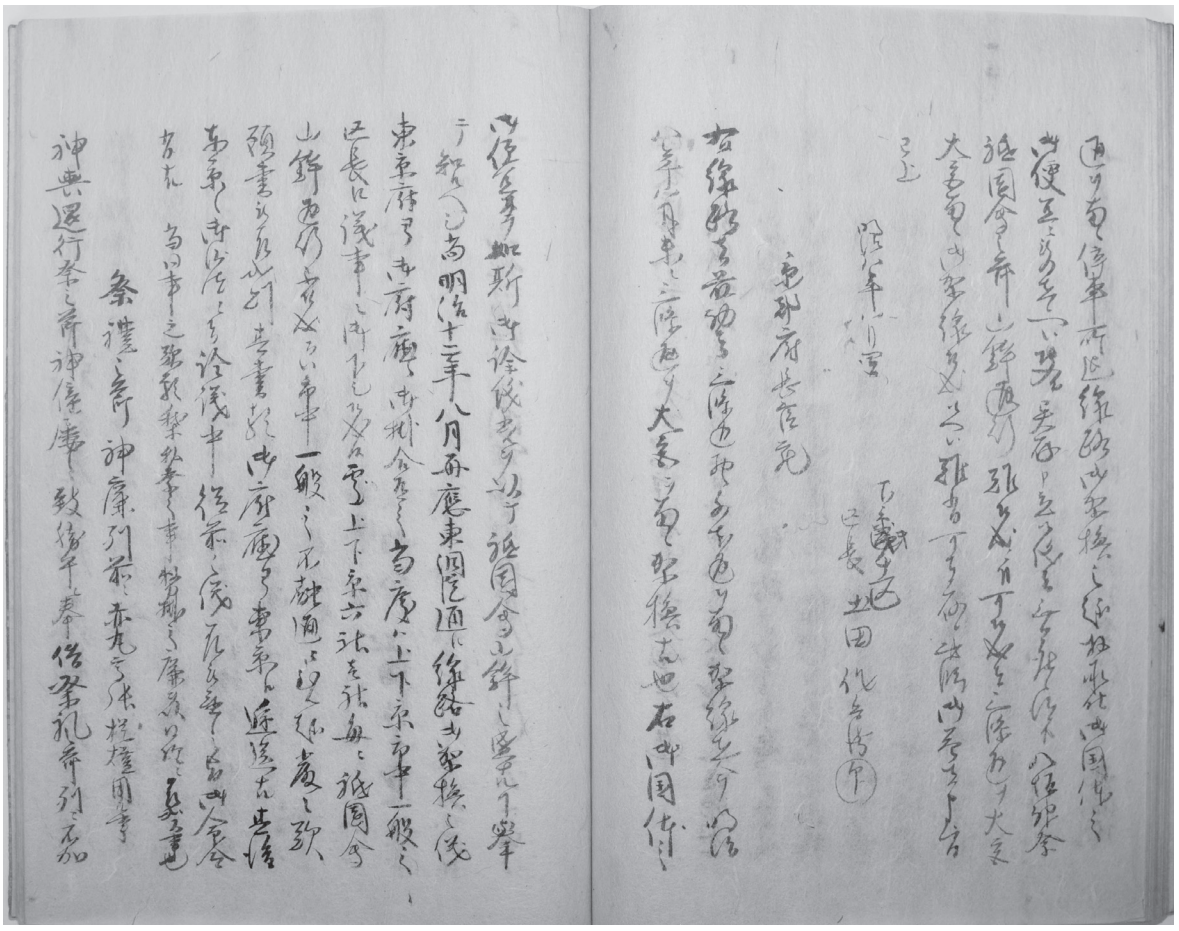


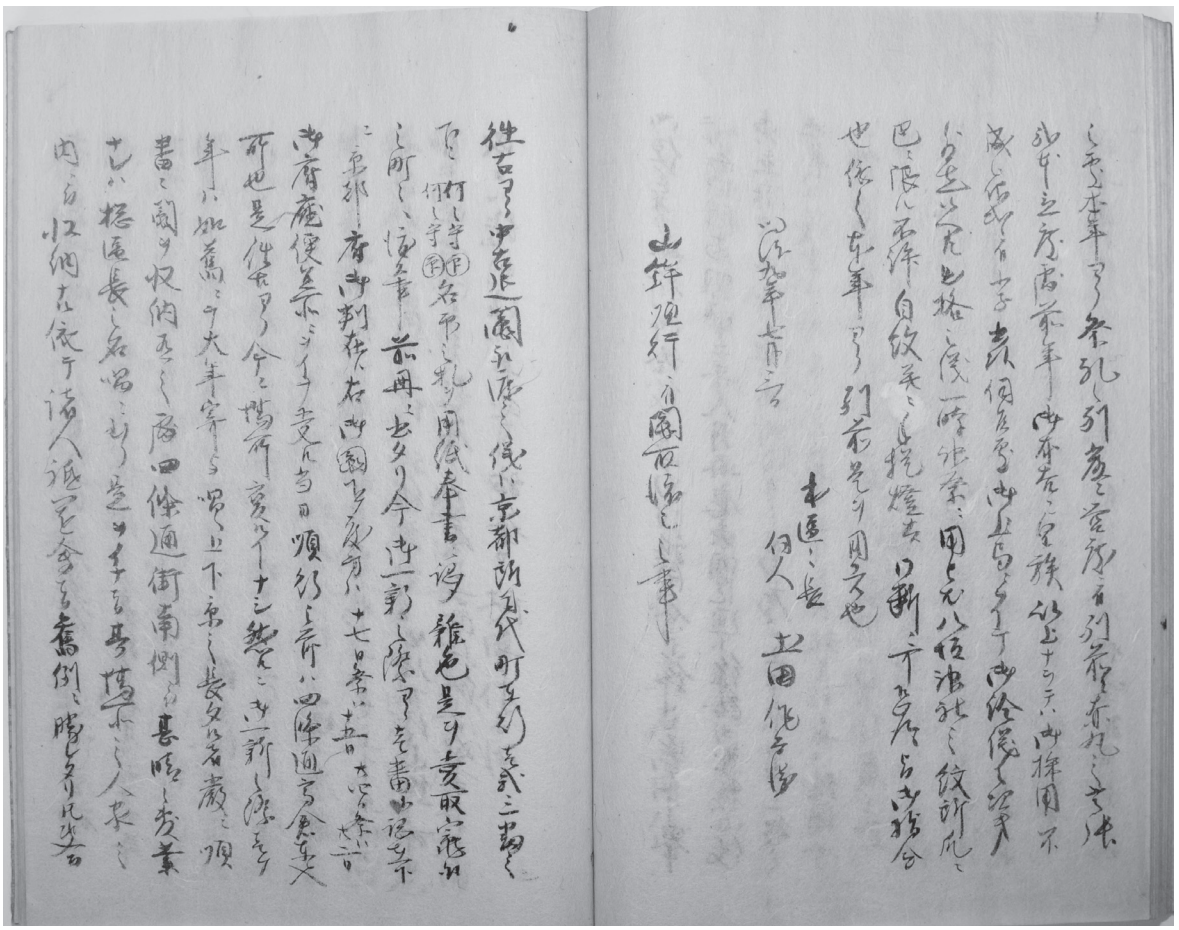
一金百弐拾四両也
内訳
右之内
一金拾四両
右之内
一金八拾八両也
内訳
右之内
一金七拾四両也

内訳
右之内
一金拾四両
右之内
一金三拾八両也
内訳
右之内
一金拾四両
右之内
一金拾四両也
内訳
右之内
一金拾四両
右之内
一金拾四両也
内訳
右之内
一金拾四両
右之内
一金拾四









有之度候間私儀今有之度候間之儀ハ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

五日　御府廳ニテ鉾山順行願書ヲ授
同日　鉾山曳初
七日　當祭日山鉾順行
同日　神幸祭禮
當日祭之分
八日　鉾建
十一日　舁山建
十二日　御府廳ニテ順行願書ヲ授
同日　鉾山曳初

十四日　當祭日鉾山順行
同日　還幸祭禮式
十八日夜　神輿迎

右順序例祭之通相務申度旨ニ付何卒此度之儀御聽ニ
被下度奉願上候以上

八坂神社祭事務掛
村田五郎兵衛㊞
土田作兵衛㊞
杉浦治郎兵衛㊞

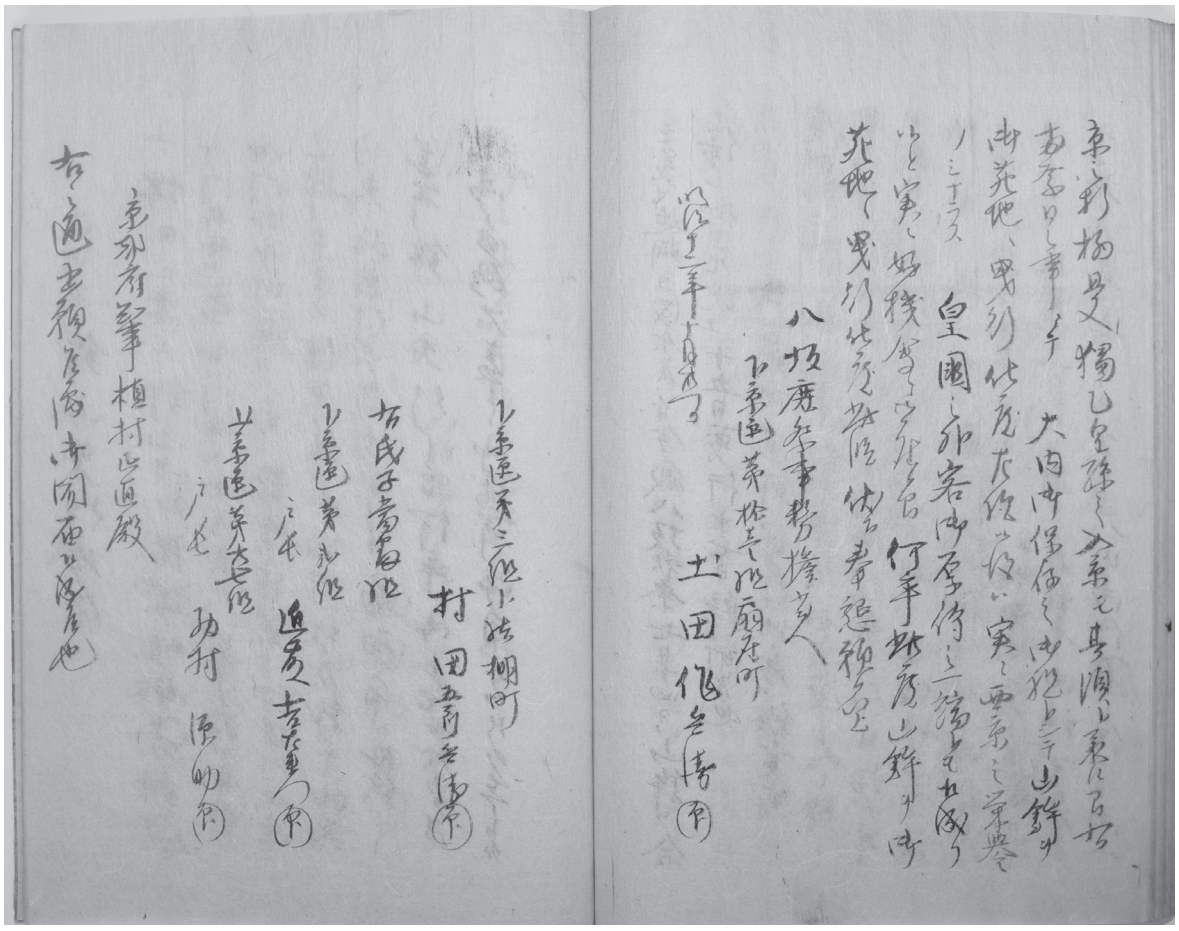
明治十二年十月十三日

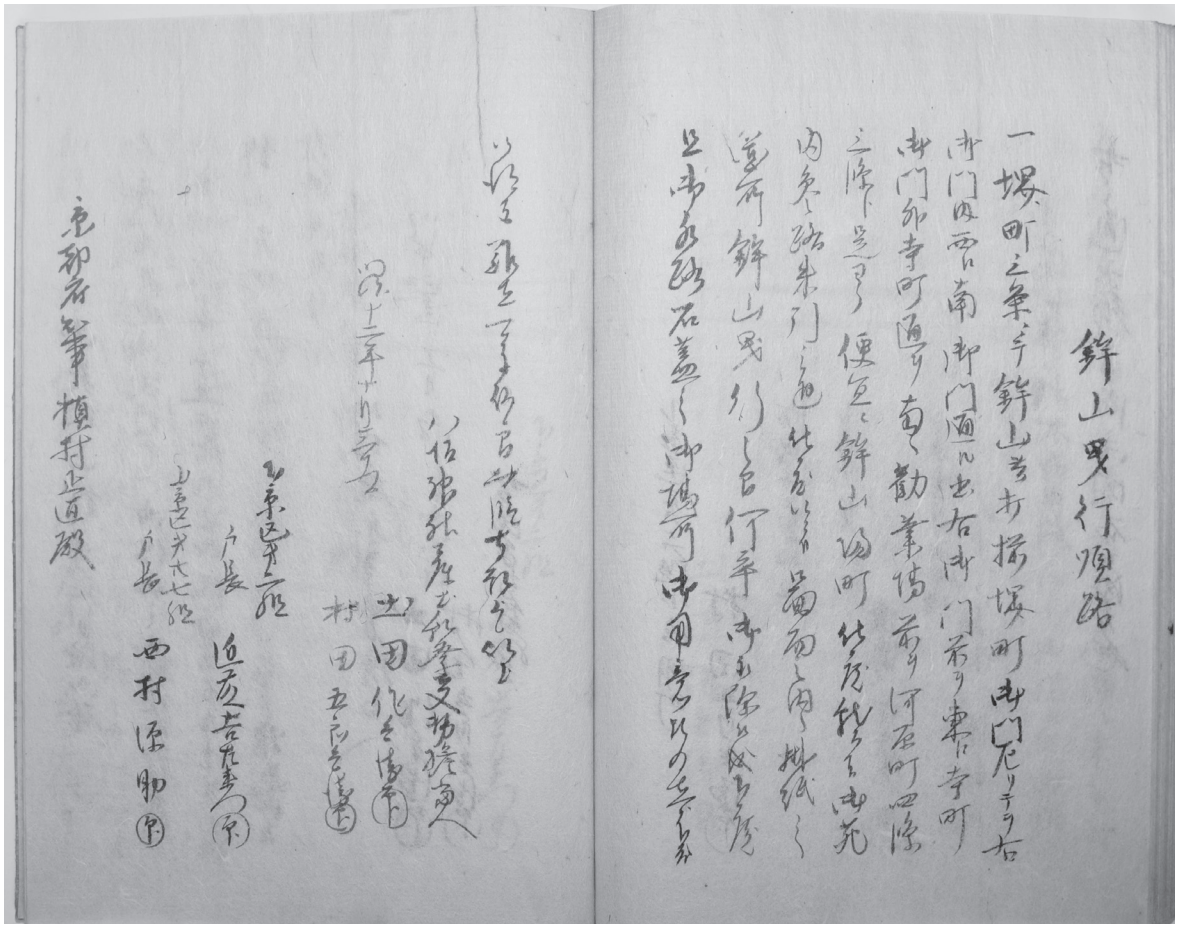
產土當番
下京第弐組
戸長近藤吉兵衛㊞
上京第七七組
戸長西村保助㊞

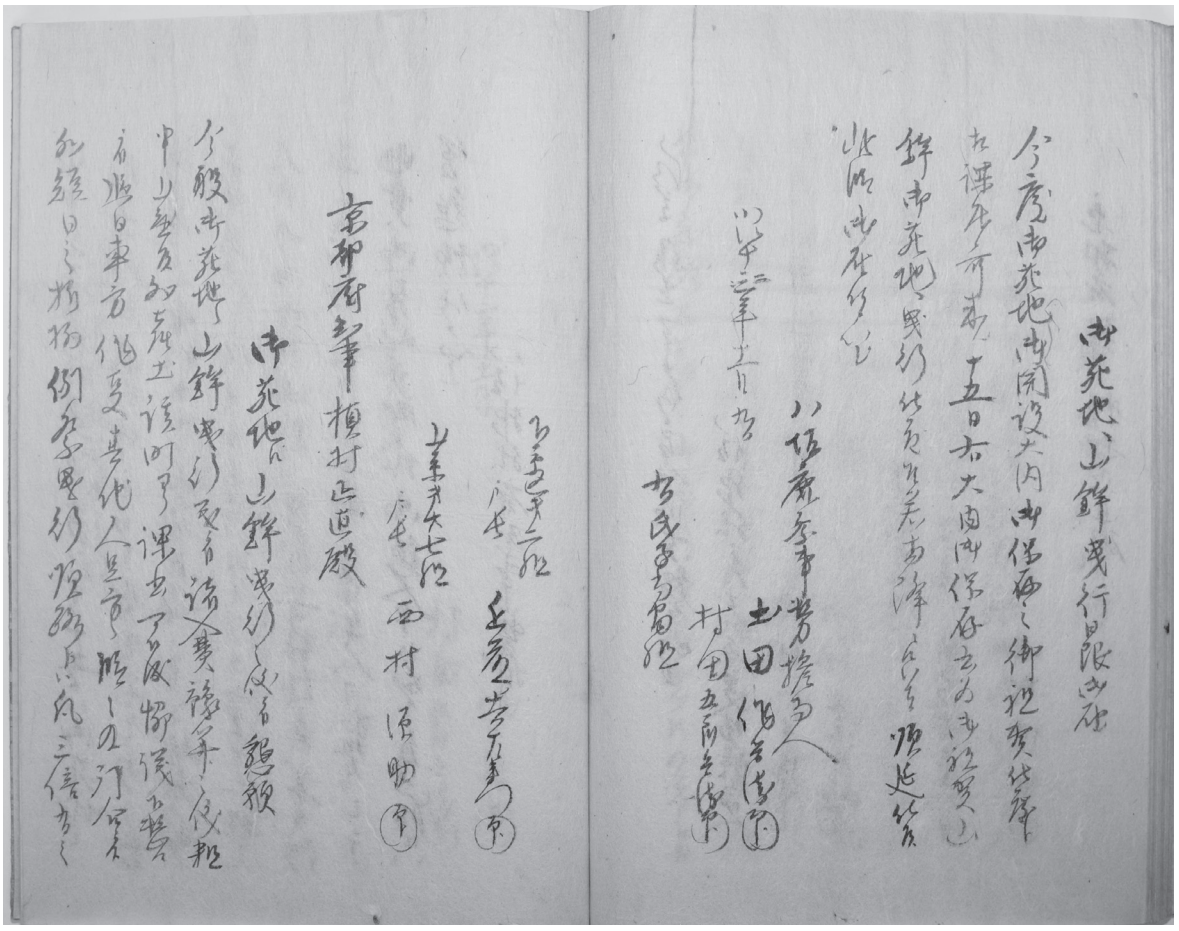
京都府知事植村正直殿

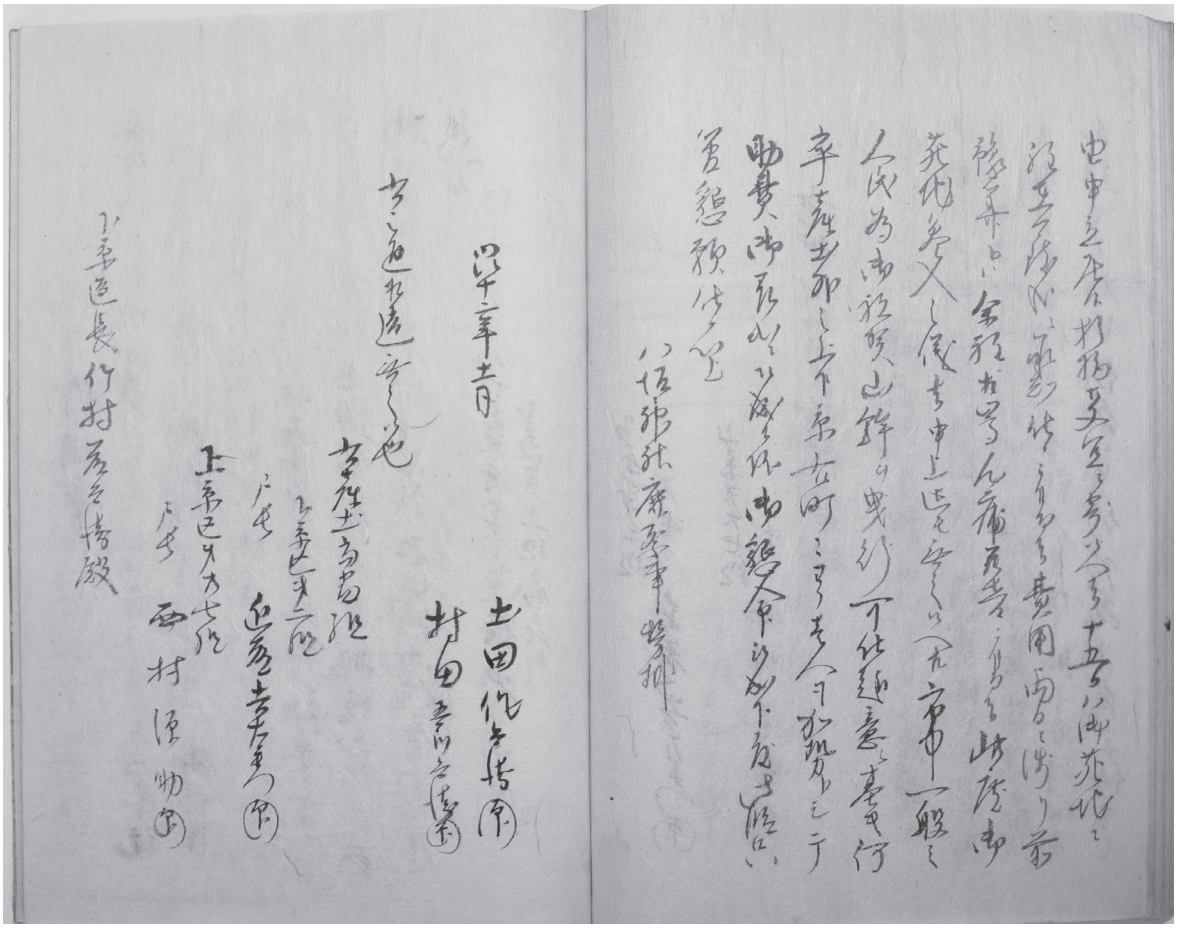
右願ノ趣聞届候事

右私祭期延之儀昨十一年十二月大内山保存之儀ニ付ハ
固等ヲ神園中設ケ候ハヽ市中一般祝事仕度存
候ニ付ハ八坂私祭期延御願ニ付右祝儀
之義ハ延期ニ成度旨今般八坂私祭七日十四日ノ山鉾ト合
併シ御旅地ニ十五日曳行十七日帰町致
御旅地ニ山鉾曳行仕度願書写
明治三年　御東幸ニ駐輦後西京庶下人ヲ騒シ
致度旨ニ付ハ十年六月　大内御保存之儀ハ御出
ニ付園幸ノ内園設ケ候ハヽ人ヲ聞ク安堵仕度事ニ
候ヘトモ　御出ニ付　大内御保存ノ儀ハ
来年ニ成度旨ニ付ハ八坂私祭ハ今迄延期
ニ成度　来年二月七日十四日ニ右私祭ニ許可ノ儀
願奉尋長ク此方ヘ大内御保存ノ儀ニ付上









御伺書

今般御苑地御開墾大内御保存ニ付有之候ハヾ氏神奉祀
ハ拾参軒ニ付山鋒町 御苑地ニ成ル 御宮様
御上覧ニ付有右山鋒町ニ御金弐拾円ニ付ニ付山鋒
町ニ統一有之弐仕右之内ニ付之金額ニ付 神奉置山ニ
前右町ニ御鎮之神前ニ御下ニ 桃燈弐張苑地
地代金怒預中ニ付不額 右氏地山何奉中之度
願ハ

八拾参廉参軒警 授与
上之巳ヲ上地廉参町

明治十二年十月七日

土田 化之書(印)
上之巳ヲ上地廉参町
村田 五郎左衛門(印)

久迫御宮様御家扶
進藤為名殿

右通内伺山鋒宮内前ニ如何ニ御伺中ニ
八拾弐社改ニ付右山鋒町 右通ニ御下也

証

明治十二年十月御苑御保存奉祀ニ付山鋒町

之際久迫宮御方ニ山鋒町中ニ金弐拾円ニ賜ル其資
料ニ付テ毛年維持ニ為幣帛捉灯御調成申
日山名町ニ弐張鋒名町ニ三張宛御度ニ成ル
致領載横年保護ニ成ル山鋒名町ニ絶代連署
ニ付テ支証ニ上候也

右提燈神ニ付相間中ニ為

明治十三年七月十日

鈴鹿山町絶代
[illegible](印)

[illegible]町絶代
[illegible]助(印)
[illegible]町絶代
[illegible](印)
[illegible]町絶代
[illegible](印)
[illegible]町絶代
[illegible](